
ドラゴンクエスト? ～天空の花嫁～

アメツチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ ～天空の花嫁～

【Nコード】

N7449X

【作者名】

アメツチ

【あらすじ】

《ここにあるのは『懐かしさ』 古き良き王道ファンタジー、開幕！》 愛する者を救うため 父、子、そして孫の三代に渡って受け継がれる強き意志の物語。 天空に導かれた者たちの冒険が今、始まる。 同名タイトルの名作RPGをたどる二次創作です。 他サイトで公開中の作品を転載。 オリジナル要素控えめ、原作に沿ったストーリー展開にしています。

1・誕生

松明が静かに燃えている。

豪奢で毛先の深い絨毯を踏みしめる感覚がいつもと違う。

「さあ陛下。こちらでございます」

「うむ。本当に苦勞をかけたな。礼を言うぞ」

実直で、かつ強靱な意志を感じさせる瞳を柔らかくに細めながら、深紅のマントに身を包んだ男は給仕の女を労った。上品な微笑みを浮かべた初老の女は、そのまましとやかに腰を折り、男を先導して歩き出す。

本当は駆け出したかった。一分一秒でも早く愛する者の元へと向かいたい。

だが男は逸る気持ちをぐっと抑えた。大柄な自分が走ればそれだけ音と振動をまき散らす。それが『彼女』には良くないのだと口酸っぱく言われていたからだ。

給仕の女に付きゆつくりと歩く。その姿は王者の威厳すら漂う。

否。男は真正銘の王だった。名をパパスという。

深き森、険しき山に囲まれた天然の要塞、堅牢にして優美さをも兼ね備えた古城グランバニア　その頂点に立つ男である。

はるか遠国にまでその勇名が響き渡るほどの猛者が、これほどまでに気もそぞろになる理由。それは

「こちらです。中ではお静かに。マーサ様もご子息様もようやく落ち着いたところでございますゆえ」

「う、うむ……」

そう。パパスとその妻マーサに、待望の男子が誕生したのだ。

一国の王から一人の父親へ。魔物相手にも決してひるまないパパスだったが、今日ばかりはいつもどおりとはいかなかった。『自分

に子ができた』という初めての経験の前には、持ち前の冷静さなど蠟燭の火のように吹き飛んでしまっていた。

精緻な意匠の施された扉をゆっくりと開ける。かすかな熱と、そして溢れんばかりの聖なる気をパパスは感じた。

中央の寝台に横たわる妻が、気配を感じて振り返る。

「あなた……」

「マーサ……！ よく、よくやってくれた」

つい小走りに駆け寄る。厳格な顔にわずかな赤みを浮かべたパパスを見て、マーサが柔らかく微笑んだ。疲れの余りか若干やつれていたが、その表情は常日頃目にする以上に美しく、神々しさすらあった。

パパスの視線が、彼女の隣で毛布にくるまれた赤子へと行く。

「ほら。私たちの子よ。今は眠っているけど、とても元気な声を上げていたわ……」

「おお、おお！ 下の階にも聞こえてきたぞ。そうか、男か！ 元氣そうだ！ うむ、目元はお前にそっくりだ！」

自分でも訳の分からないことを喋る。その様子に乳母がくすりと笑った。

マーサが声をかける。

「ねえあなた……。この子に名前を付けてあげないと」

「うん？ おお、そうだな。何がいいか」

パパスはしばらく寝台の回りを歩いた。顎に手をあて、これまでにいくつも考えた候補の中から選んでいく。この感動を表現し、自分と愛する妻の宝となるに相応しい名を。

しばらくの沈黙の後、パパスはマーサに向き直った。彼には珍しい、満面の笑みを浮かべて言う。

「よし。トンヌラというのはどうだろうか」

「まあ、素敵な名前……賢そうで、優しそうで」

「だろっ？」

「ええ。……ねえ、あなた。私もこの子の名前を考えてみたの」

遠慮がちな妻の申し出に、パパスは無言で先を促した。

「アラン……というのは、どうかしら？」

「アラン、か。いまいちぱつとしないが……お前が考えたのなら、そうしよう」

妻に笑いかける。ばさり、と深紅のマントを翻し、パパスは赤子とそつと抱え上げた。

「アラン。今日からお前はアランだ！」

「まあ、あなただったら……ごほっ、ごほっ！」

「マーサ？ どうした、すっかりしろ。マーサ！」

声は次第に遠くなる。

潮騒の音が、どこからか聞こえてきた。ぞぞん、ぞぞん……と。

2・船上の勇氣

ぎし……ぎし……

規則正しく響くその音に、アランは目を覚ました。

固い寝台に横になっていると、身体がゆっくりと上下に動いているのを感じる。揺りかごのように心地よいその揺れからアランは身体を起こした。

利発で優しそうな瞳が印象的な少年である。滑らかな肌は健康的に日焼けし、儂さよりはたくましさが目を引き。

アランは枕元に置いた帽子を手にとった。ざんばらで伸び放題の黒髪を、青い布を巻いて作った簡素な帽子で包み込んだ。

寝台の縁に腰掛けたとき、部屋の中心で読み物をしていた男が振り返った。

「おお、起きたか。アラン」

「お父さん」

口元に蓄えた髭も凜々しいこの男はパパスといった。アラン自慢の父親である。

「うゝ……ん」と伸びをしてから、アラン少年は父の元へと駆け寄った。

まだたったの六歳ではあるが、父に連れられいくつかの旅を経験したアランは、寝坊という言葉とは無縁の生活を送っていた。これも長旅で鍛えられた結果である。

机の縁に顎を寄せ、しばらく父の横顔を眺めていたアランは、ふいに声をかけた。

「ねえお父さん」

「ん？」

「僕、ゆめを見たんだ。りっぱなお部屋で、お父さんがすごく格好いいマントをしているの。おうさまなんだって」

「王様？ はっはっは。アラン、どうやらまだ寝ぼけているようだ

な」

嘘じゃないのにな、とアランは思ったが、それ以上何も言わなかった。ただ不満そうに頬を膨らませるだけである。

その様子を見たパパスは苦笑を浮かべながら、読んでいた分厚い書物を閉じた。アランは以前、興味本意でその中身を見てみたが、長い文章どころか文字も読めないアラン少年はすぐに頁をめくるのを諦めた。それ以降、父の本にはあまり触らないようにしている。

「もうすぐ港に到着する。それまで外で遊んでなさい。潮風に当たれば眠気も覚めるだろう」

「うん」

「だがあまり走り回るんじゃないぞ。甲板にいる人々の迷惑にならないようにな」

「はい」

アランは駆け出し、すぐに何かを思い出して引き返す。部屋の隅に設えられたタンスから、薄紙に包んだ薬草を取り出す。

「これがあれば怪我をしてもだいじょうぶだよね？」

微笑むパパスに、アランは薬草を片手に元気よく言った。

「それじゃ、行ってきます！」

階段を上がり、扉をくぐる。

途端に頬を撫でる冷たい風に、アランは思わず眼を細めた。

澄み渡る蒼い空。

天高くどこまでも盛り上がる雲。

風を受けゆつたりと飛ぶ鳥たち。

そして空よりもさらに深く濃い青に染まった大海原。

アランは巨大な船の上にあった。

数日前、アランたちはパパスの顔なじみの船長と偶然再会し、どこかのお金持ちが所有するこの船に便乗させてもらったのだ。目指すはサンタローズという村である。かつてパパスとアランが住んでいた長閑で平和な村だ。

そこはアランの記憶に残っている最初の故郷である。
サントローズに帰れると思うと、自然と気持ちが高揚した。

陽光のまぶしさに目を細めながら、アランは口笛をくちずさむ。
波に揺れる甲板上也何のその、軽やかな足取りで目当ての場所へと歩いて行く。やがて甲板の幅はぐっと狭くなり、揺れも大きくなった。船首の部分だ。

帽子と同じ青色の、粗末な布の服を海風にはためかせながら、アランは鋭く突き出た舳先部分へと進む。下を見れば目もくらむような高さだが、アランは取り立てて恐怖を感じた様子もなく、「うわあ！」と感嘆の声を上げた。

海。空。水平線だ。

世界はどこまでも広い。

いつか自分が大きくなったら、父とともに世界中を旅して回りたい。それが幼いアランの大きな夢であった。

「おおいつ！ 坊主、危ないぞ！ 戻ってこい！」

ふと背後から船員の呼ぶ声があった。気がつくとも舳先はかなり先の方まで進んでいたようだ。慌てて戻り、船員の前に立つ。全身真っ黒に日焼けした船員の男は大げさなため息をついた。

「ああびつくりした。まったく、坊主の身に何かあったら俺が船長にどやされるんだぜ？」

「ごめんなさい」

アランは素直に頭を下げた。船員は怒ったような、困ったような表情を浮かべていたが、やおら豪快に笑い始めた。

「ま、危ない危なくないは抜きにしてだ。坊主、お前よくあそこまで行けたな？ 怖くなかったのか？」

「ううん。とっても楽しかったよ。海って、すごく広いだね」

「そうかそうか。さすがパパスの旦那の息子さんだ。勇気がある」

ばんばんばん、と頭を叩かれる。おそらく本人は撫でているつもりなのだろうが、アランとしてはたまったものではない。小さく「おじさん……いたい」とつぶやく。

だが船員の男は気にした風もなく、嬉しそうに語り始めた。

「いいか坊主。坊主が立つてた舳先の部分はな、俺たちの船乗りの中じゃ『勇気を試す場』になっているのさ。新米のヒヨッコどもは、まず大抵あそこに立つと怖じ気づく」

「え？ ふなのりさんなのにな？」

「そうさ。坊主は勇気がある。新米ヒヨッコの半分も生きちゃいなにもかかわらずだ。きっと大人になったらどえらいことをやってのけるぞ、坊主！」

「どえらいことって？」

「どえらいことは、その……どえらいことだよ。ま、まあそのうちわかるって」

ばんばんばん、と相変わらず容赦なく叩かれる。それが親愛の表れだと子どもながらに察したアランは、目の端に小さく涙を浮かべながらも笑顔でうなずいていた。

3・小さな出逢い

その後、アランは船の中を探検した。乗船してから数日、すでに何度も船内は見回っていたが、何度見ても面白い。

例えば風に揺れる帆の様子とか。

床一杯に敷き詰められた荷物の山とか。

何故か風呂場で自分を驚かそうとしてくる変なおじさんとか。

逢う人逢う人、みな笑顔で迎えてくれる。そして誰もが、アランの父パパスはすごい人だと言ってくれるのだ。アランにはそれが何より楽しく、そして誇らしかった。

だが、その楽しい旅もそろそろ終わりの時を迎えようとしている。水平線ばかりだった海に、うつすらと陸地の影が見え始めたのだ。「港が見えたぞー！」

マストの先に作られた見張り台で、船員が大声を上げる。にわか慌ただしくなる船上の直中に立ちながら、アランは興奮と寂しさを同時に感じていた。

「そろそろお別れだな、坊や」

声をかけられ振り返る。真っ白な服を着た初老の男性が微笑んでいた。航海中、よくパパスと話をしていた船長だ。アランもずいぶんと可愛がってもらった。まるで実の息子のように。

わずかにうなだれるアランの頭を撫でながら、船長は言う。

「さ……お父さんと呼んできてくれないか。もうすぐ港に着く」

「うん」

小さくうなずいたアランは駆け出した。客室にいる父を呼びに行く。

アランから港到着の報を受けたパパスは感慨深そうにうなずいた。「サンタローズを出てもう二年になるか。早いものだな。まだお前が四つのおきだから、覚えていないかも知れないが」

「うっん。僕の故郷だよ、お父さん。覚えてるよ」

「そうか。では、行くとしよう。忘れ物がないようにな」

そう言うとパパスは部屋を出て行く。父に連れ立って扉をくぐったアランは、ふと背後を振り返った。誰もいなくなった部屋に向かって深くおじぎをする。

「お世話になりました。行ってきます」

辿り着いたのは、巨大な船体には少々似つかわしくない小さな港だった。

操舵手の妙技でぴつたりと横付けされ、棧橋の代わりに大きな板が船との間にかけられる。アランは父と並んで、その作業を感心しながら眺めていた。

そのとき、港に人影があることに気付いた。三人。

「ルドマンさん！ お待たせしました！」

「ご苦労、船長さん！ 相変わらず時間どおりで感心ですな！」

船長と気安げに会話する港の人物。遠目でも恰幅が良さがわかった。傍らには小さな女の子がふたり、寄り添っていた。

ルドマンと呼ばれた男が棧橋代わりの板に足をかける。同時に、右側にいた女の子がルドマンを追い抜いて船に駆け込んできた。黒髪が海と空の蒼に映える。あっという間にパパスの前まで辿り着く。

きよとんとするパパスに向かって、黒髪の女の子は気の強そうな瞳を向けた。

「おっさん。邪魔よ」

「お、おっさ……？」

思わぬ台詞にパパスが目を白黒させる。次いで女の子はアランにも目を向けた。ほとんど睨むような表情ながら、そこに潜む可憐な容貌にアランはどきりとした。

「こらデボラ！ 待ちなさい」

「ふんっだ」

ルドマンの声にも振り返らず、デボラと呼ばれた少女はさらに奥へと駆けていった。彼女が向かったのはアランが唯一、立ち入ることが許されなかった専用の客室がある場所だった。

ルドマンがようやく板を渡りきる。傍らにはもう一人の女の子がいた。

アランはまたも、どきりとする。

大きなリボンと空のような蒼い髪が印象的だった。デボラとは反対に、清楚な華を思わせる可愛らしい女の子である。

彼女はアランの視線に気付くと、わずかに身体をルドマンに寄せた後、はにかみながら頭を下げてきた。

ルドマンが恐縮の体でパパスに詫げる。

「申し訳ない、お客人。私の娘がとんだ粗相をしてしまいましたな……」

「いえ。お気になさらず。元気があるのは大変良いことです。……その子もあなたの？」

「ええ。フローラと言います。私はこの子らの父、ルドマンと申します。さ、ご挨拶なさい。フローラ」

「はい、お父様。……初めまして。フローラと言います。さきほどはねえさ……姉が失礼をしました」

「これは驚いた。ずいぶんしっかりしたお嬢さんだ。……っと、失礼。挨拶が遅れましたな。私はサンタローズのパパス。こちらは私の子、アランです」

「は、はじめまして……」

突然名前を呼ばれ、アランはどきどきしながら礼をした。何だか格好悪いなと思いつつながら、ゆっくりと顔を上げる。

ルドマンは「利発そうなご子息ですな」と朗らかに笑い、フローラは先ほどよりも打ち解けた笑顔を見せてくれた。アランは再び顔を赤くしてうつむいた。

それからパパスとアランは船長に感謝の礼を言い、併せてルドマンたちの船旅の安全を祈った。彼らもまた、パパスたちの行く末に

幸多きことをと祈ってくれた。

船はゆっくりと出航していく。その後ろ姿を見つめながら、アランはふと、偶然出逢った二人の少女の顔を思い出すのであった。

4・リスの恩返し

船が出てすぐ、パパスとアランの元に駆け寄ってくる人影があった。

「おおつ、パパス！ パパスじゃないか」

「あらあら、まあまあ。ずいぶん久しぶりだねえ！ 二年ぶりじゃないかい？」

彼らは港の管理をしている夫婦だった。パパスとは旧知の仲である。

しばらく旧友と雑談をしていたパパスは、所在なげに立っていた息子に向かって言った。

「父さんはこの人たちと話があるから、しばらく散歩でもしていないかい」

「うん。わかった」

「よし。だがアラン、港の外には出るんじゃないぞ。危ないからな」

「はい」

アランは歩き出した。

港は陸から建物だけ突き出たような形になっていて、海面がすぐ側にある。海からの風も気持ちよく、アランは終始上機嫌だった。

ふと、どこからか声が聞こえた。

「きい、きい……」という動物の声だ。アランの表情が変わる。その声はどこか、助けを求めているように思えたからだ。

声の主はすぐに見つけた。港の端、木組みの足場がやや崩れているところで、大きなリスが一匹足を取られていた。口には小枝を噛んでいる。どこかにその枝を運ぼうとして誤って嵌ってしまったのかもしれない。

アランが近づくと、リスはさらに甲高い声を上げて暴れた。

じっとリスを見つめながら、アランはゆっくりと言う。

「だいじょうぶ。もう心配いらないよ。キミを助けてあげる」
リスがびたりと大人しくなる。リスの大きな黒い瞳がアランを見つめていた。

慎重にその身体に手をかけ、アランはリスを解放した。ほっと息をつく。どうやら怪我もないようだ。

「ほら。お行き」

促すとリスは勢いよく駆け出した。微笑みながらそれを見送るアラン。

ところがリスは、港と陸地とを繋ぐ棧橋のところで立ち止まった。アランを振り返り、尻尾とヒゲをびくびくと動かす。

「……付いてこいつてことなのかな？」

アランが歩き出すとリスも走り出す。アランと一定の距離を保つように、たびたびリスは振り返ってきた。どうやら本当にどこかへと案内してくれているようだった。

棧橋を越えてすぐ脇に林がある。リスはその中へ入っていく。しばらく行くと、何やらこんもりと枝が盛られた場所へと辿り着いた。そこから数匹の小さなリスが顔を覗かせている。

「ここがキミの家なんだ。立派だね。でもいいの？ 僕をここに連れてきても」

するとリスは巢の回りに落ちているものを鼻先で示した。財布やら人形やら、おそらく旅人が落としたであろう品々が土にまみれて転がっているのがわかった。中にはわずかながらお金ゴールドもある。

どうやら助けてくれた御礼に持っていけということらしい。

一度は断ろうとしたが、リスが服の裾を引っ張ってまで引き留めようとするので、アランは仕方なく落とし物のひとつを手を取った。細長い木製の武器 『ひのきの棒』である。おそらくただの枝と間違えて持ってきてしまったのだろう。巢の脇にどことなく邪魔そうに置いてあるのが印象に残っていたのだ。

落とし物の割にはしっかりした加工である。幾重にも布が巻かれた握りの部分に手を添える。見よう見まねで構えてみると、何だか

憧れの父に近づけたような気がして嬉しくなった。

リスがきい、きいと鳴く。「気に入ってくれてよかった」と言っているようだった。

「ありがとう。じゃあ、元気でね」

アランはリスたちに別れを言った。元来た道を引き返していく。パパスとの旅で鍛えられたせいも、方向感覚には少し自信がある。

迷うことよりも、父の言いつけを破った形になってしまったことの方が心配だった。

「早く戻らなきゃ」

少し焦りながら、アランは林を抜ける。

その直後だった。

「えっ……？」

目の前にモンスターが現れたのは。

5 はじめての戦い

「ピキイッ」

草むらから現れた三体のモンスター。青く小さな身体を震わせながら、アランに対して威嚇の声を上げてくる。

「ス、スライム!?」

「ピキイッ!」

「うわあっ!」

いきなり襲いかかられ、アランは尻餅をついた。彼の頭があった場所を、一匹のスライムが通過していく。体当たりされたのだ。以外と俊敏なスライムの動きに、アランは背中に汗をかく。

別の一匹が正面から迫ってきた。アランは唇を噛み、右手の『ひのきの棒』を握り直した。

父の姿を思い出しながら、正眼に構える。

「……来いっ」

「キユイイッ!」

アランの声にに応じて、スライムが飛び込んできた。アランは目を逸らさず、大きく武器を振り上げた。震える足を叱咤して、一步前へ踏み出す。

「はあああっ!」

そして思いつき振り下ろした。

ひのきの棒のちょうど中心のところ、スライムの身体をとらえる。握りの部分に痺れるような衝撃が伝わってきた。

力が緩み、手放しそうになるのを堪え、最後まで振り抜く。

スライムの身体が吹っ飛んだ。

「……イ……」

草むらに落ちたスライムは小さく声を上げ、やがて姿が消えた。

アランは荒い息をつきながら、自らの手を見る。

そこにはまだ、先ほどの感覚が痺れとして残っていた。

「やった……！」

会心の一撃

アランは初めて、自分の力だけでモンスターを撃退したのだ。だが、勝って兜の緒を締めるには、まだアランは幼すぎた。

「キイイツ」

「あっ!？」

残った一匹がアランの左腕にかみついたのだ。鋭い痛みとともに左腕がかあつ、と熱くなる。無我夢中でスライムを引きはがした拍子に、赤い血が空に舞った。

数歩下がって、アランは小さく呻く。先ほどまで感じていた高揚感が急にしぼんでいくようだった。

仲間と合流したスライムが二匹、真正面から迫ってくる。

「これが」

戦い。

父の雄姿を間近で見るときは「何て格好いいんだろう」と思っていた。いつか自分も、と思っていた。

でも、今の自分は

「キイ、ピキュキイイツ！」

「……お父さんっ！」

ぎゅっ、とアランは目をつぶる。

そのときだ。

「おおおおおっ！」

勇ましい、けれど懐かしい雄叫びとともに、風がアランの横を通りすぎた。

目を開ける。ああ、とアランは歓喜の声を上げた。

「お父さん！」

「下がっている、アラン！」

言うが早いか、パパスは愛剣を手にスライムの一匹に斬りかかった。

その動き、まさに疾風迅雷。

スライムは避けることもできずに真つ二つに両断される。

残った一匹がパパスの方を向く。その時にはもう、パパスは次の踏み込み動作に入っていた。

「むんっ！」

返す刃で雑草ごとスライムの身体を薙ぎ払う。悲鳴も上がらずスライムは全滅した。

恐るべき二回攻撃。

アランは感動に打ち震えるとともに、自らが握っていた『ひのきの棒』を少ししよげた表情で見つめた。

「大丈夫か、アラン」

パパスが近づいてくる。アランは笑顔でうなずくこととして、左腕を押さえた。

「……痛っ」

「待つてる。すぐに治す。………、ホイミ！」

かざしたパパスの手から、白く温かな光が漏れる。アランの腕の傷がだんだんと塞がっていった。

そうだ、とアランは思い出す。パパスは剣技だけではない、回復呪文も使えるのだ。アランはまだ、呪文のひとつも使えない。覚えるならまず真つ先にこの呪文にしよう、とアランは思った。

腕の痛みも傷口もすっかり消えてなくなったのを見届けると、早速パパスはアランを叱った。

「アランよ。外に出ててはいけないと父さんは言ったはずだな。言いつけはきちんと守らなければいけないぞ」

「……ごめんなさい」

「ふむ」

すると何を思ったか、パパスは草むらを見た。

「しかし、たった一人でスライムを倒すとは、正直父さんも驚いた」

「……え？」

「だが今後はひとりで危ないことはしないように。いいな？」

「うん」

「よし。では行くとしよう」

差し出された父の大きな手を握り、アランは笑顔で歩き出した。

6・サンタローズの村

広々とした草原となだらかな丘をひたすら歩くと、鬱蒼と茂る森と小高い山が見えてきた。そこがアランたちの目的地である。

木々に半ば隠れるように、ひっそりと村があった。

「ようやく着いたか。サンタローズ」

パパスが感慨深げにつぶやく。普段は勇猛で冷静沈着な父だが、どこことなくほっとして嬉しそうだのアランは思った。

村の入り口にあたる木組みの門の前には、簡素な鎧を着込んだ男が門番として立っていた。彼は村にやってくる人影に一瞬目を細めたものの、すぐに破顔一笑、満面の笑みで迎えてくれた。

「やあ！ パパスさんじゃありませんか！ お久しぶりです！」

「ああ。しばらくぶりだった。皆に変わりはないか？」

「ええ、もちろん。おっと、こうしちやいられない。皆に報せないと！」

言うが早いか、男は門の番を放り出して村へと走っていった。アランはつぶやく。

「お仕事、いいのかなあ」

「はっはっは」

むつかしい顔をするアランに、パパスは声に出して笑った。

父に連れられ門をくぐる。その先の石段を登ると、さっそく出迎えがあった。

「パパスさん、お帰りなさい。二年ぶりですね」

「うむ」

「またうちによってくださいね。良い酒を用意してお待ちしていますから。旅の話聞かせてくださいよ」

「ああ、楽しみにしていよう」

笑顔で話しかけてくれたのは村で唯一の宿屋と酒場の店主だった。丸々と太った身体にはどことなく、アランも見覚えがあった。

砂利道沿いに歩く。小川をまたぐ小さな橋を越えた辺りで、今度は大声に迎えられた。

「ようパパス！ 二年もどこほつつき歩いていたんだ！」

見るからにガタイの良いその男に、パパスは苦笑を浮かべた。

「はは。相変わらず威勢が良いな」

「つたりめーよ。アンタとはまだ飲み比べの勝負がついてねえんだ。付き合ってもらうぜ。ついでに旅先でのあれこれも聞いてやっからよー！」

「うむ。受けて立とう」

がつ、と拳を合わせる二人。口は悪いが、男もまたとても嬉しそうだった。「お、この子があのときの坊主か。大きくなったなあ」と頭をぐりぐりされ、アランは恥ずかしいやら嬉しいやら複雑な気持ちになる。

すっかりずれてしまった帽子を直しながら再び父の後ろをついていく。空は雲一つ無い快晴だ。曆の上ではもうすっかり春である。しかし。

「……くしゅん！」

「おお、風邪か。アラン」

「ううん。でも、何だかすこしさむいね」

「……うむ。確かにな。季節はとつくに春だというのに、風が冷たい」

パパスが神妙にうなづく。道ばたでは季節外れのたき火をしている人がいた。そういえば来る途中の道沿いにあった畑は、発育が遅れているのか少々寂しい見た目だったことをアランは思い出す。

不思議なこともあるんだなあ、とアランは思った。

「パパス殿」

もうすぐ目的の場所というところで、シスターに出迎えられた。

物静かな感じの初老の女性が、往来の真ん中でまっすぐにパパスを見つめている。

「よくぞ戻られました。ご壮健そうで何より」

「はい。皆には心配をかけました」

「これも神のお導きなのでしょう……とまあ、堅苦しい挨拶は抜きにして」

突然、シスターがにっこりと笑った。

「わーい、わーい。パパスさんが帰ってきた！ 嬉しいー！」

「シ、シスター……」

「うふふ。嬉しいことを我慢するのは良くないことですよ。さあ、お疲れでしょう。サンチヨさんがご自宅でお待ちですよ」

パパスはシスターに深々と礼をした。去り際、シスターがにっこりと笑ってアランに手を振ってきた。何だか嬉しくなって、アランもまた満面の笑みで手を振り返した。

教会へと続く道の脇に、アランたちが目指す家がある。

質素だが立派な造りの家の前で一人の男が立っていた。その姿を見て、パパスとアランの表情が自然と緩んだ。

7 お姉さんな少女

「旦那様！ お坊ちゃん！ お帰りなさい！」

「サンチヨ！ 今戻ったぞ！」

パパスが破顔一笑する。アランも満面の笑みで手を振った。

丸々と太った身体を揺らしながら走ってきたのは、パパスの召使い、サンチヨである。口ひげに小さな丸い目が印象的な、とても人当たりの良い男だ。孤高の人というイメージがあるパパスが唯一、彼だけは従者として認めている。サンタローズの家を留守にしている間は、彼が自宅の一切をきりもりしていた。

外見からは想像できないようなてきぱきとした動きでサンチヨはパパスらから荷物を受け取った。久しぶりに逢えた嬉しさからか、目にはわずかに涙まで浮かんでいる。

「サンチヨ、泣いてるの？」

アランが尋ねる。すると途端にサンチヨの顔がぐしゃっと崩れた。「おお、おお、アラン坊ちゃんも！ 大きく、遅しくなられて。このサンチヨ感激ですぞ」

「僕は元気だよ。サンチヨはあいかわらず、すぐに泣いちゃうんだね」

「こら、アラン」

パパスが小声で叱り、アランが首をすくめる。涙を拭ったサンチヨはパパスたちを自宅へと招き入れた。

簡素だが手入れと掃除の行き届いた居間。そこには先客がいた。

「あら、パパスさんじゃないかい」

「ダンカンとこのおかみさんじゃないか。お久しぶりです」

意外な来客にパパスが驚く。サンチヨに負けないほど恰幅の良いおかみはからからと笑った。

するとその影からひとりの女の子が顔を出す。

「こんにちは。おじさま」

「……？」

パパスは首をかしげる。見覚えがない女の子だったからだ。

「この子は」

「ああ、そうか。パパスさんは初めてだったっけ。あたしの娘だよ。ピアノカってんだ」

おかみが紹介する。ピアノカと呼ばれた女の子は再び頭を下げた。柔らかそうな金髪を三つ編みにした彼女がにっこりと笑う様はとも明るく愛らしかった。どことなくお転婆そうでもある。

パパスとサンチヨ、それからおかみが話を始めた。父の隣で所在なげに立っていたアランは、ふと裾を引かれて振り返る。ピアノカがすぐそばに立っていた。

「ね。おとなたちのお話が長そうだから、向こうに行かない？」

「う、うん」

「行きましょ！」

言うのが早いか、ピアノカはアランの手を引いて二階へと上がっていく。元気の良い子だなあ、と思うと同時に、どこか懐かしい感じをアランは抱いた。

二階はパパスの書斎もかねた部屋だった。壁際にぎっしりと本が詰まった棚が置かれている。アランとピアノカは、少し高い椅子によじ登った。

「じゃあ、あらためて自己紹介ね。わたし、ピアノカ。あなたはアランでしょ？」

「え？ 僕のこと知っているの？」

「うん。でも、おぼえてないのもしかたないよね。前に会ったときは、アランとつても小さかったもの。知ってる？ わたしはあなたよりも二さいもおねえさんなのよ！」

自慢げに胸を張られた。アランが今六歳だから、ピアノカは八歳ということになる。だから懐かしく感じたんだとアランは思った。

「そうだ！ ご本読んであげる。ちょっと待っててね」

ぼん、と手を打って、ビアンカは椅子から降りた。本棚から一番薄い本を取ってきて、机の上に広げる。が。

「えーと。……………？ ……………？」

読めない。かろうじてふりがなの部分だけは拾い拾いして読んでいたが、それ以外はさっぱりのもようだった。首を傾げ、むつかしそくに眉根を寄せて、何分もしないうちにビアンカはさじを投げてしまった。

「だめだわ。このご本、むずかしすぎるもの」

「そうだね。でもすごいや。僕はまだ、文字がぜんぜん読めないもの」

「だってわたしはおねえさんだもの。えっへん」

胸を張る。それからふたりして声に出して笑った。

「ビアンカー、そろそろ宿に戻るよ！」

階下から呼ぶ声にビアンカが「はい」と答える。丁寧に本をしまつてから、ビアンカはアランを振り返った。にぱ、と笑う。

「しばらくはサンタローズにいるから、またお話ししようね！ アラン！」

「うん。またね、ビアンカ」

手を振り合う。とんとんとん、と軽やかな音を立ててビアンカは一階へと下りていった。

8・ともだちのために

翌日。

久しぶりに温かい食事と温かいベッドに包まれたアランは珍しく寝坊をしてしまった。目が覚めたときにはすでに太陽は高く昇っていて、眠い目をこすりながら一階に下りる。

居間にはパパスとサンチヨが揃っていた。

「坊ちゃん、おはようございます」

「うん。おはよう、サンチヨ」

「久しぶりの我が家だ。ぐっすり眠れたか、アラン」

父の言葉に「うん」とうなづく。ふと、パパスが剣を携えていることに気がつき、首を傾げる。

「お父さん。どこかへ出かけるの？」

「ああ。村の外に出るわけではないから、夕方までには戻るつもりだ。……ではサンチヨ。行ってくる。アランを頼むぞ」

「はい。行ってらっしゃいませ、旦那様」

出かける父の後ろ姿を見ながら、アランはテーブルについた。すぐに温かなスープが出されたが、しばらくそれには手を付けず、アランはどことなく寂しそうにつぶやいた。

「……お父さん、村についても忙しそうだね」

「お父上には大切なお仕事があるのですよ」

「せっかくあそんでもらえると思ったのに」

テーブルの端っこに顎を乗せて頬を膨らませる。その様子にサンチヨは苦笑していた。

「さあさ、坊ちゃん。せっかくのスープが冷めてしまいますよ」

「はぁーい」

ぶーたれていたアランだが、久しぶりのサンチヨの食事にすぐに

機嫌を取り戻す。旅をしている間は粗食を余儀なくされたときもあったから、育ち盛りのアランにとってお腹いっぱいご飯が食べられることはとても幸せなことだった。

「ごちそうさま！ ねえサンチヨ、外であそんできてもいい？」

「ええ。外は良い天気です。ただ少し肌寒いので、お召し物には注意してくださいね。あ、それから、くれぐれも危ないところへは行かないよう」

「わかってるよ。サンチヨはしんぱいしようだなあ」

そう言っただけでアランは椅子から降りる。少し考え、アランは着ている服の上からさらに一枚薄地のマントを羽織り、あの親切なリスがくれた『ひのきの棒』を腰に下げる。

ちよつとした冒険者気分になったアランは、「いつてきます！」と元氣よくサンチヨに言っただけで家を出た。

途端に吹きつける冷たい風。そういえば昨日の晩ごはんのとき、パパスとサンチヨが農作物がどうのこうの言っていたことを思い出す。

「はやくあたたかくならないかな。みんな困っているのに」

雲一つない空を見上げながらつぶやく。

村の中心を通る砂利道まで出たところで、ふとパパスの姿を見かけた。ちょうど教会から出てきたところだ。パパスは足早に歩き始める。

お仕事のじゃまをしちゃだめだ、という思いが一瞬アランの頭をかすめる。だが結局、父がどんな仕事をしているのかという好奇心の方が勝った。こっそり後を追う。

するとパパスは川沿いにある民家のひとつへと向かって行った。玄関では老人がひとり待ち構えている。老人と二言、三言話をしたパパスは、そのまま民家の中へ入っていった。あそこが父の仕事場なのだろうか、とアランは思う。

何をしているのだろう、お父さん。

さすがに他人の家の中まで追うわけにはいかないと思ったアラン

は、民家が見渡せる教会横の高台に向かった。崖から落ちないよう、慎重に民家を見下ろす。

しばらくして、パパスが民家の裏口から出てきた。薪割りでもお手伝いするのかな、とアランは思った。しかし手に斧は持っていない。それらしい雰囲気はなかった。

「…………あれ？」
首を傾げる。

パパスは、一緒に出てきた老人に見送られ、川に浮かべてあった小舟に乗って上流へとこぎ出していったのだ。その先は大きな洞窟がある。すぐに、父の姿は洞窟の奥へと消えていった。

「お父さんのお仕事って…………どうくつのたんけん？」
一瞬、後を追ってみようかなと思う。だが舟なんかないし、第一危ないところへは行くなとサンチョに言われている。

「むう…………」
けれど、気になる。
もやもやした気持ちを抱えたまま、アランはその場を後にした。

「そついえば、ピアンカはまだサンタローズにいるんだっけ」
宿屋の前を通ったとき、ふとアランは思い出した。まだ胸のもやもやを抱えていたアランは、せっかくだからこっちから遊びに行こうと思った。

扉をくぐる。
「いらっしやい…………おや。パパスさんこの坊主じゃないか」
「こんにちは」

ペこりと頭を下げてから辺りを見回す。小さいながら小綺麗に掃除がされた室内の奥には、いくつかの部屋が続いている。だが当然のことながら、どこの部屋にピアンカがいるのか見ただけではわからない。

すると宿屋の主人が気を利かせてくれた。

「もしかして、ダンカンさんとこのお嬢さんに会いに来たのかい？」

「うん。こっちにまだいるって聞いて。一緒にあそぼうと思ったんだ」

「なるほどね。ま、坊主にとつちや久しぶりに同じ年頃の子と会えたってことなんだろうなあ。いいよ、案内してあげる」

人の良い笑みを浮かべ、宿屋の主人が二階へとアランを連れて行く。

西側奥の、いちばん日当たりのいい部屋にピアンカたちは居るといふ。

「この寒さで、なかなか旅人がやってこないからなあ。ウチとしては商売あがったりだ。だけど、そんな中でもはるばるアルカパからやってきたあのふたりは相当の大物……というか強者だよ」

廊下で主人が言う。そしてふいに声を潜めて、

「……でも今の話は、ふたりにはナイショだよ」

「うん」

「良い子だ。……っと、この部屋だよ坊主。すみません、おかみさん。いらっしやいますか」

主人が呼びかけると、しばらくして扉が開いた。怪訝そうに首を傾げていたおかみさんは、アランの姿を見つけるなり表情を崩す。

「おや、アランじゃないか。もしかしてピアンカに？」

「うん。一緒にあそぼうと思って」

アランが言うと、おかみは何故か複雑そうな顔をした。

「うーん。いつもなら思いっきり遊んでおいでと言うところなんだけどねえ」

「？」

「あ！アランだ。どうしたの？」

部屋の奥から声がする。ピアンカが小走りに近づいてきた。アランはどこかほっとしながら笑った。

「こんにちは、ピアンカ。あそびにきたよ」

「え、ホント!？」

「駄目だよビアンカ。いつ薬が届くかわからないんだから」

表情を輝かせるビアンカにおかみさんが言う。

「薬が手に入り次第、アルカパに戻るんだからね。父さんが待ってるんだよ」

「……うん。ごめんなさい」

「ねえ。なにがあつたの？」

ビアンカが哀しそうな顔をするので、アランもまた哀しい気持ちになりながらたずねる。落ち込んではいられないと思ったのか、ビアンカはむりやり笑顔になった。

「あのね。アルカパにいるわたしのお父さんが病気になっちゃったの。それで、よくきくお薬がサントローズのどろぐやさんにあるって聞いて、お母さんと一緒にとりに来てたの。でも、そのどろぐやさんがなかなか帰ってこなくて、少しこまってるのよ」

「かえってこない？」

「お弟子さんの話じゃ、どうやら洞窟に材料を取りに出かけて帰ってきてないみたいなんだよ。まあ、こういう時がないわけじゃないらしいし、大事ではないとは思っただけだね。ただあんまり日が経ちすぎるとウチの人が心配だから、できるだけ早く薬を持って帰りたいんだよ。それでビアンカにもあんまり外には出るなって言っているのさ。すぐに出発できるようにってね」

そう言っておかみさんはため息をついた。

「誰か洞窟まで様子を見に行ってくれないかねえ……」

「お父さん」

ビアンカもどことなくしゅんとしている。

とても遊びに行けるような雰囲気ではなかった。アランはすごくごと部屋を後にする。

しばらくうつむき加減で廊下を歩いていたらアランは、ふと立ち止まった。腰にさげている『ひのきの棒』を見る。

『誰か洞窟まで様子を見に行ってくれないかねえ……』

「……よし！」

アランは決意の表情で柄を握りしめた。

9・サンタローズの洞窟

川から流れてくる湿気が肌に冷たい。

緊張を解すため、大きく息をする。胸の中に入ってくる空気は、外のものとは明らかに違っていた。

アランは今、洞窟の中にいる。

ビアンカたちの話を聞いて意志を固めたアランは、その足でここへ訪れたのだ。途中、入り口のところで門番代わりの男に呼び止められはしたが、特に追い返されることはなかった。

「中は人が通れるようになってるが、モンスターもいる。それでもいいならおじさんは止めないよ」

そう言っすんなり通してくれたのだ。

なるほど、彼の言うとおり、洞窟の中は点々と松明が灯され、足元も人が通りやすいようにならされている。この洞窟で作業をする人のために整備されたのだろう。

だが、それでもアランにとっては初めてのひとりでの冒険である。『ひのきの棒』を両手に握りしめ、アランは緊張の面持ちで奥へと進んで行った。

アランの胸にあるのは、困っているビアンカたちを助けたいという思いと、勇敢なパパスの息子であるという誇り。奥にいるであろうパパスのことを思うと、若干だが勇気が湧いてきた。

サンタローズに来る前、船員に言われたことを思い出す。

『坊主は勇気がある。新米ヒヨッコの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になったらどえらいことをやってのけるぞ』

「……こわくない。だいじょうぶ。僕がやるんだ」

かつん、かつんと洞窟の中に靴音がこだまする。どこか遠くで「キィ、キィ」という声を聞いたような気がした。間違いない。いく

ら整備されているとはいえ、ここにはいるのだ。モンスターが。そのとき。

「ピキーンッ」

「っー」

左手、岩陰からスライムが飛び出してきた。一匹。威嚇するように甲高い声を上げている。

だがアランは取り乱さなかった。息を吸い、吐き、また吸い、吐く。

『ひのきの棒』を構える。要領はわかっていた。

「僕は……負けないっ。行くよっ！」

「ギューピイッ！」

荒い息をつく。

岩の一つに背を預け、アランは休息を取っていた。額に浮かぶ汗しかし洞窟内が涼しいせいか、すぐに冷たく乾いてしまう。風邪を引いてしまいかもしれないなとアランは思った。

だがその表情は明るい。

最初のモンスター、スライムを撃破してからしばらく経った。

その間、幾度も戦闘を繰り返して、その都度退けてきた。『自分は戦える』ということに密かな自信を深めていったのだ。

何より。

「、、ホイミ」

短く、丁寧に呪文を唱える。

途端、掌に温かい光が集まり、戦闘で受けた傷を癒していく。

呪文とは世界から与えられた力だという。天賦の才を持ち、経験を重ねて、その資格を得た者だけがそれにふさわしい呪文を行使することができる。

アランは最初に覚えることができた呪文が回復呪文ホイミであることに、胸がいっぱいになるほどの喜びを感じていた。パパスが自分を心配してかけてくれる呪文、今度はそれをアランの方からパ

スへとかけることもできるのだ。それはアランにとって、とても誇らしいことだった。

だが、嬉しいことばかりではない。

重なる戦闘で、リスからもらった『ひのきの棒』にひび割れが起きたのだ。

攻撃を空振りし、思いっきり岩を叩いてしまったことが響いたのかもしれない。これではいつ使い物にならなくなってしまっかわからなかった。

少しだけ悩んだ。

「きつとまだ、だいじょうぶ」

気が大きくなっていたアランはそのまま勢いよく立ち上がり、再び歩き始める。

右手にもった武器が、ぱきり、と微かな異音を立てた。アランは気付かなかった。

10・痛恨の一撃

がこん、という妙な音が響いたのはそのときだ。

アランが振り返ると同時に、細かく砕けた石が高速で頬をかすめる。

「……っ」

緊張で身体が硬くなった。それはアランにとって、初めて出会うモンスターだった。

身の丈はアランより低く、しかしその小さな手に持つのは巨大な木の鎚。どこか愛くるしい容姿とは裏腹に、闘争本能をみなぎらせた目をしている。足元には、鎚で抉られた痕がくつきりと残っている。

『おおきづち』だ。

その小さな迫力に思わず唾を飲み込むアラン。たじろいだ一瞬の隙を突き、おおきづちはいきなり襲いかかってきた。

力任せに、大上段から木鎚を振り下ろす。

再び、がこん、という異音が響く。地面を叩いた音だ。

横っ飛びで攻撃をかわしたアランは、その威力に冷たい汗をかく。だがこれまで戦ったスライムや、こうもりの姿をした『ドラキー』などと比べれば、攻撃が大味な分かわしやすかった。

地面にめり込んだ木鎚を引き抜くのに手間取っている間に、アランは横合いから『ひのきの棒』を振り抜いた。

「いやああっ！」

手首から肘、肩、そして身体全体に伝わる確かな手応え。アランの攻撃を受け、おおきづちは吹っ飛んだ。

よし、やった。そうアランが思ったとき、おもむろにおおきづちが起き上がった。そして何事もなかったかのように再び木鎚を振

り上げる。その動きにはまるで変化がない。

効いてないのか。アランはたじろぎながらも、再び攻撃をかわした隙を狙って武器を叩き付ける。

だがおおきづちは、まだ倒れない。

「……いたっ！」

手首に違和感。無理矢理叩き付けたせいで少しひねったようだ。

思わず、手首を押さえる。

おおきづちから視線を外した、その刹那。

「あっ」

気がついたときには目の前に木鎚が迫っていた。とっさに『ひのきの棒』を構え、攻撃を受け止める。

武器が、おおきづちの攻撃を受け止める衝撃。

直後、『ひのきの棒』は真ん中から粉碎された。

木鎚の勢いは止まらない。そのまま振り抜かれた 腹に直撃。

「……かふっ」

ふわ、と身体が浮いた。

ぐるん、と世界が反転して。

息も吸えないまま地面に叩き付けられた。

痛恨の一撃。

「げほっ、げほっ。ごほっ！」

まともに息ができない。苦しさから手に力が入る。折れて使い物にならなくなった『ひのきの棒』が手の中にあった。

「げほげほっ、……っ！」

その攻撃を前転でかわせたのは、ほとんど偶然に近い。

アランは苦しさから逃れようと無理矢理息をするが、うまくいかない。涙がにじんだ。

おおきづちの動きには、やはり変化がない。

手にした木鎚をぎゅっと握りしめたのがわかった。

アランの頭はその瞬間、真っ白になった。

「う、うわああああああっ！」

逃走。全力で走った。

ずきん、ずきんと腹が痛む。実際はアランが思うほど足は動いていなかったのだが、必死のアランはそのことにも気付かない。

とにかく、立ち止まったらやられてしまうと思った。

どれくらい走っただろう。

ついに身体の方が音を上げて、アランは座り込んだ。そこがちよつと湧き水の湧いているところだったから、アランは無我夢中で水を口にする。爽やかで、微かに甘みのある水に混じり、何とも言えない苦みが口の中に広がる。それが血の味だとアランは初めて知った。

岩に背を預ける。

そして思い出したかのように、自らが走ってきた通路を見た。

おおきづちは、追ってこなかった。やぶれかぶれの逃走は、何とか成功したようだった。

「ふうう……」

腹の底からため息をつく。そして攻撃を受けたお腹をさすった。

わずかに痛みが残るが、思ったよりひどくない。さつき水を飲んだおかげか、気持ちの方はかなり楽になっていた。

ホイミをかける。だが呪文を唱えたのも束の間、傷が癒えきる前に癒しの光は消えてしまった。どうやら精神力の方が切れかけているらしい。

おそろおそろ、手を見る。そこにはまだしっかりと、折れた『ひのきの棒』が握られていた。

武器もない。

呪文もしばらく使えない。

いや、それより。戦闘から逃げた自分を、パパスはどう思うだろうか。そのことの方が心配だった。

憧れの父なら、こんなときどうするだろう。

アランはじっと、天井を見つめていた。

そのときだ。アランの身体が再び固まる。聞こえたのだ、あの甲

高い声が。

「キュイツ!?!」

間違いない。スライムだ!

アランは唾を飲み込んだ。血の味は、まだ消えていなかった。

11・スライム君

「キュイツ！ まって、いじめないで！ ボクはわるいスライムじゃないよ」

「……え？」

折れた『ひのきの棒』を構えたアランは、突然ひとの言葉を喋り始めたスライムに呆然とした。

ぼよん、ぼよん、と地面を跳ねる姿はまさしくスライム。けれどよく見ると、その大きな目に宿る光がどことなく優しそうだった。スライムはアランの姿に驚いたのかしばらく離れたところにいたが、やがて親しげに近づいてきた。

「うん。キミはわるいひとじゃないんだね。なんとなくわかるよ」

「えっと。スライム、くん？ 君はどうして言葉がわかるの？」

「ボク、ときどきここにくるしよくにんさんたちとなかがいいんだ。ごはんをもらったり。ことはしぜんにおぼえちゃった」

「そっか。じゃあ君はわるいスライムじゃなくて、しよくにんさんたちの友達なんだ」

「そう！ ともだち！ ともだちだよ！」

スライムは嬉しそうに一回転した。その可愛らしい仕草に、アランも疲れを忘れて微笑む。するとスライムは少し声を落として聞いてきた。

「ところで、キミ、おおきづちにいじめられていたみたいだけど、だいじょうぶ？ あのひとたち、ぜんぜんてかげんしてくれないから」

「うん。ひどいケガはしてないんだけど……見たの？」

「ごめんね。ボク、とつてもよわうちいから、たすけにいけなかったんだ。それに、ボクはひととなかよくしているから、おなじスラ

イムからはきらわれているんだ」

「そんな！　こんなにいい子なのに。ひどいよ」

「でも、ここにいればしょくにんさんがきてくれるから、さみしくはないよ。さすがにひとのすんでいるところまでは、いけないけれど……」

「そっか……」

アランはうつむく。モンスターと仲良くできることはアランにとつてとても嬉しい発見だったが、そのせいでモンスターの仲間と離ればなれなのは寂しいと思ったのだ。

「ねえスライム君。僕と友達にならない？　僕はアラン」

「アラン！　いいなまえだね！　でもこまったな。ボクはきまっとなまえがないんだ。しょくにんさんはいろんなよびかたをしてくれるし……スラリンとか、スラぼうとか……でもスライムくんってよびかたはいいな！　それにししてね」

「う、うん。わかったよ、スライム君」

苦笑いしながらアランは思う。もし自分がこのスライムのような友達を他に持てたとしたら、その子ともずっと仲良くしていこう。

「そういえば、しょくにんさん、だいじょうぶかなあ」

「どうしたの？」

「うん。ちよつとまえにね、しょくにんさんがこのどうくつにはいつてきたんだけど、まだかえってきてないんだ。いつもならとっくにかえりのあいさつによってくれるのに」

「それって、お薬を作っているしょくにんさん？」

「そう！　ひげもじゃだけど、とってもやさしいひとなんだ。しつてるの？」

「会ったことはないんだけど……帰りを待っているひとがいるんだ」

「それはいけないね。たしかあつちのおくのほうにいったとおもうよ。ちよつとまえにらくばんがあつて、おおきなあながあいているからあぶないよつて、おしえてくれたんだ」

「そっか。わかった、ありがとう。スライム君」

アランは立ち上がる。意気揚々と歩き出そうとして、ふと、手元に残った武器に気がついた。

「あ……でも、僕にはもう戦ったための武器がないんだ。どうしよう。一度戻った方がいいのかな？」

「ぶき？　ぶきならあるよ」

「え？　ほんと？」

「こつち」

そう言っつて、スライムはアランを奥へと導く。岩の陰に隠れるように、それは置いてあった。

「これだよ。しょくにんさんがつかってたんだけど、もういらなからってボクにくれたんだ。でもボクにはつかえなくて、こまっつたんだ」

「これっつて、『かしの杖』……かな」

アランの身長よりも大きな杖だ。触つてみるとずっしりと重く、温かな木の感触に比べてとても硬い。これならば、ちよつとやそつとで折れることはなさそうだった。

「ちよつと重いけど、なんとかかなりそう。ありがとう、スライム君」！

「どういたしまして。きをつけてね。あいつら、きつとまたおそつてくるだろうから。しょくにんさんによろしくね」

ぴよんぴよん跳ねながらスライムが別れの挨拶をする。洞窟に入つて以来の満面の笑顔で手を振りながら、アランはその場を後にした。

12・負けないよ！

地面を荒く削ってできた階段を下りる。「こほん」とアランは軽く咳をした。

何やら砂埃が舞っている。壁に備え付けられた松明の光に照らされ、細かな粒がきらきらと舞っていた。

奥で声がする。呻き声のようだ。

『かしの杖』を抱えながらアランは走った。折れ曲がった道の先は広場になっていた。天井は高く、時折細かな砂が落ちる。漂っていた砂埃の正体はこれだったのだ。

その真下、ちょうど広場の中央に、大きな岩が転がっていた。呻き声はその下から聞こえてくる。

「おーい、おーい」

「だ、だいじょうぶ？」

「おおつ。助けに来てくれたのか！」

アランが駆けつけると、岩の下で横たわっていた男が歓声を上げた。初めアランは、男の下半身が丸々下敷きになっていると思いい顔を青くしたが、男はあっけらかんとした表情で言った。

「帰ろうとしたら上から岩が降ってきてなあ。ご覧の通りの有様で動けなくなっていたんだ。ああいや、心配するな。わしがはまったのはちょうど窪みになったところ。運良くぺしゃんこにならずに済んでるよ。ただ抜け出そうとして腹がつかえてしまっただけなあ」

「えつと。お薬を作っているしょくにんさん？」

「いかにも。まさかお前さんのような小さな子が来てくれるとは思わなかった。勇気のある子じゃ」

下敷きになったひげもじやの男に言われ、アランは苦笑しながら頬をかいた。

男は逞しい腕を伸ばし、下から岩を押し上げる仕草をした。

「お前さん、ちょっと手伝ってくれんか？ もう少しでどかせそうなんだ」

見ると、少しだけ岩が浮いている。地面の凹凸を利用すれば、確かに転がしてどかせることができそうだ。アランは言われたとおり、に岩に手をかけた。

「いいか？ いちにのさん、で行くぞ。それ、いち、にの」「さんっ！」

渾身の力を込める。ぐら、と岩が傾いたかと思うと、次の瞬間には大きな音を立てて岩は転がった。「ふいー、助かったわい」と言いながら男が立ち上がる。

「ありがとう、礼を言うよ。ずいぶん力持ちなんだなあ」

「ううん。そんなことないよ。おじさんが力持ちなんだ」

「はっはっは。……おっと、こうしちやいられない。急いで帰らなければ。ではな、坊主！ お前も早く戻るんだぞ！」

「あっ、おじさん！」

言うが早い、男はあっという間に走り去っていった。小太りな体型に似合わない俊敏な動きだった。あれでどうして岩の下敷きになったのか、もしかしたら結構どじな人なのかもしれない。

くすり、とアランが笑ったときである。

「うわああっ」という男の悲鳴が洞窟内に響き渡った。アランは『かしの杖』を握り、慌てて駆け出した。

階段のふもとで男が立ち止まっている。彼の前に立ち塞がっていたのは

「おおきづち……」

顔を強ばらせるアラン。

武器である大きな木鎚を振り回しているのは、まさしくおおきづちだった。

がつんっ、と威嚇するように地面を叩く。相変わらずの力だった。しかも一匹ではない。三匹。上へ登る階段を塞ぐように立っ

る。

「こりゃあ……まいったな。さすがに今のわしでは三匹同時は……」
「さがって、おじさん」

決意の表情でアランが前に出る。男は驚きの声を上げた。

「まさか、戦うつもりか？」

「うん。この子の仲間とは一度、戦っているんだ。……まけちゃったけど」

「それなのに戦うつもりなのかい、坊主!？」

「うん。だって、にげてばかりじゃ、お父さんをつかりさせちゃうから。それにおじさんも守らないとね」

アランは身長よりも大きな『かしの杖』をおおきづちに向けた。

「……今度こそ、まけないよ!」

おおきづちがいきり立ったように襲いかかってきた。

13・父の言葉

飛び上がった一匹を追いかけけるように、残りの二匹のおおきづちもまっすぐアランに突進してくる。

統制が取れた　というより、我慢できずに各々が勝手に飛びかかってきたという感じだ。アランは横っ飛びにかわした。勢い余ったおおきづちたちはたたらを踏む。

アランは力強く踏み込んだ。全身を使って、手にした『かしの杖』を振り回す。

ぴりっ、と脇腹が痛んだ。

「くっつ！」

それでも武器を手放さず、アランは振り抜いた。

空気を押ししのけ、硬い杖の先端がおおきづちの身体を打ち据える。鈍い音が響き、おおきづちが吹き飛んだ。他の一匹を巻き添えにして、壁に叩き付けられる。

「坊主、危ないっ」

職人の男が声を上げる。無事な一匹が横合いから木鎚を振りかぶっていた。

『かしの杖』はアランの身体よりも大きく、重い。一度大振りしてしまうと構え直すのに時間がかかる。その隙を突かれた。

嫌な記憶がアランの頭をよぎる。あれを頭に受けたら　と考える身体が一瞬固くなる。

アランは叫んだ。自らを鼓舞し、無我夢中で『かしの杖』をそのまま振り回し続けた。先端で円を描き、踏み込むと同時に真上から打ち下ろす。

木鎚と真正面からぶつかり　そのままはじき飛ばす。

『かしの杖』はおおきづちの頭頂部を直撃した。鈍い感触が両手

に広がる。

おおきづちは倒れたまま動かない。もしかしたら隙を見て立ち上がってくるのでは、とアランは思ったが、すぐにおおきづちの身体は粒子となって消えていった。

全身の力が抜ける。直後、思い出した。

「そうだ、あといつぴき！」

慌てて武器を構え直そうとするが、気が緩んでしまったのか全身に力が入らなかった。

早く、早く　自らを急かしながら、何とか杖を持ち上げる。

顔を上げた。

おおきづちの姿はどこにもなかった。

「……あれ？」

「逃げたよ。ついさっきな」

安心したような、呆れたような声を出し、職人の男がアランに声をかけてきた。

「それにしても見事だったぞ、坊主！　まさかその年で、おおきづち三匹を退けるとはおお！」

「……うん。僕もちよつと信じられないかも。あ、そうだ！　おじさん、ケガはない？」

「おお。お前さんのおかげでびんびんしとるわ。世話をかけたの」「よかった……」

息をつく。すると今度こそ脱力で立っていられなくなった。尻餅をつき、『かしの杖』を落とす。

男が手を差し伸べてくれた。

「よく頑張ったな。ここから先はわしに任せろ」

「え？」

「子どもひとりにはいい格好ばかりさせられん。出口まで送っていくよ。それに……ほれ。なかなか言えんじやる。岩の下敷きになって子どもに助けられ、道中もその子に送ってもらいました、なんて」

「……ぶっ」

思わずアランは吹き出す。男はひげもじやの顔に苦笑を浮かべた。
「よし、そーれ」

男はかけ声とともにアランを背負う。アランはびっくりしながらも、かつてパパスに肩車してもらったときのことを思い出して嬉しくなった。

「モンスターから逃げ出したこと、これでお父さん許してくれるかな」

「はて。お前さんの父親は」

「パパスって言うんだ。とてもつよいんだよ」

「パパス……おおっ！？ 坊主、あのパパス殿の息子さんかい！？

いや、どうりで強いわけだ！」

「えへへ」

アランは頬をかいた。しみじみと男は言う。

「えして立派な親を持った子はどこか難しいところを心に抱え込んでいるものじゃが、お前さんは違うようじゃな。心配せんでもええ。パパス殿ならきつと許してくれる。胸を張って、強く生きる事だ」

「うん」

「よし。いい子だ」

男は笑った。

こうしてアランは初めてのひとり冒険を無事、乗り切ることができたのであった。

「聞いたぞ、アラン」

職人の男とともに無事、洞窟を抜けたその夜。

少し切れていた口の痛みを我慢しながら、夕食のスープを飲んでいたアランに、パパスが声をかけた。思わずびくり、とアランは身体を震わせる。

何となく、怒られると思ったのだ。

落ち着いて考えればちょっと無茶なことをしたかなと自分でも思う。それに、アランは一度モンスターの前から逃げ出してしまっていた。パパスにはそのことを伝えていない。何となく、後ろめたかったのだ。

恐る恐る顔を上げる。父の顔は怒ってはいなかった。いつもの精悍な顔に、どことなく呆れたような表情を浮かべていた。

「親父さんから聞いたぞ。ひとりで洞窟の奥まで入っていったそうじゃないか」

「ご、ごめんなさいっ」

思わず頭を下げる。するとパパスは「ふっ」と笑った。

「まあ、無事に帰ってきたのだ。よくやったな」

「え?」

呆然とするアラン。サンチヨが困惑の声を上げた。

「しかし旦那様、私は気が気じゃありませんでしたよ……。お昼になっても坊ちゃんはまだ帰ってきませんし、帰ってきたら帰ってきたで怪我をされていたじゃありませんか。もう私は心配で」

「はっはっは。相変わらずお前は心配性だな。あの洞窟はモンスターこそ出るが、村人も入る整備された場所だ。確かにひとりきりで入ったのは感心せんが……。何事も経験だ」

「はあ……。さようでございますか」

「そうとも」

「あ、あの。お父さん」

アランの呼びかけにパパスが振り返る。しばらくうつむいてもじもじと手を合わせていたアランは、意を決して告げた。

「僕……モンスターからにげちゃった。こわくなって、痛くて……。お父さんなら絶対ににげないはずなのに。僕、お父さんのことにもなのに」

「それは本当か、アラン?」

「……うん」

「そうか」

深くうなづくパパス。今度こそ、アランは叱責を覚悟した。

「それはますます、お前のことを見直さなければならぬ。アラン」

「……？」

「人間、誰しも怖くなる時がある。強大なモンスターの前には敗れ去ることもあるだろう。そんなとき大切なのは、命を粗末にしないことだ」

「それって」

「逃げたことを気にしているのなら、それは筋違いということだ、アラン。時には逃げて、自分の身を守る必要もある。生きていれば再戦の機会もあるだろう。それがさらなる成長へと繋がることもある。だが死んでしまつては、元も子もないのだ」

「お父さん……」

「大切なのは生き残ること、生き残る意志を持つことだ。……しかし」

そこでふと、パパスは遠い目をした。

「時には、たとえ命を捨てることになるうとも戦わなければならぬいときがある」

「旦那様……」

何かに思い至つたのか、サンチヨの声が沈んだ。

パパスがスプーンを置いた。真っ直ぐにアランを見つめる。

「アランよ」

「はい」

「逃げるなどとは言わない。だが自分が何のために戦っているのか、何のために生きようとしているのか、それは忘れてはならぬ」

「……」

アランは目を伏せた。父には申し訳ないが、アランには難しすぎる内容だった。ただ、自分のしたことが間違っていなかったということだけは、何となく理解することができた。神妙にうなづく。

パパスが破顔一笑した。

「そろそろ、お前にも剣の稽古をつけなければならぬ。まだ小さいと思っていたのに、月日が経つのは早いものだ。まあ、しばらくは子ども用のナイフからだが」

「お、お父さんっ」

「はっはっは」

頬を膨らませるアランの前で、パパスは気持ちよさそうに笑っていた。

14・親たちの願い

翌朝。

アランはパパスに呼ばれ宿屋の前に来ていた。「出かける用意をするように」の言葉通り、いつもの外套と帽子を被っている。いつもと違うのは、その背に大きな『かしの杖』を背負っていることだ。けど、何で宿屋なんだろう。アランは首を傾げながら父が出てくるのを待っていた。

しばらくして、パパスが宿屋から出てきた。後ろに誰かを連れている。

「あ、アラン！　じゃあアランもいつしよに行ってくれるの？」

「ビアンカ？　いつしよに？」

アランは目をしばたかさせた。彼女の後ろには母親であるおかみさんもいる。

パパスは言った。

「親父さんが帰ってきたことでおかみさんも無事、薬を手にするこ
とができた。これからアルカパへ帰るそうなのだが、やはり女二人
では心許ない。そこで私が送っていくことにしたのだ」

「すまないねえ、パパスさん。いつもいつも」

「なに、気にしないでください。……そういうわけでアラン。お前
も一緒に連れて行くこうと思うのだ。いいな？」

「うん。わかった」

「やった。アランといつしよだ」

無邪気に喜ぶビアンカ。アランも嬉しくなっつてつい笑った。

では早速行くとしよう、というパパスの声かけとともに、アラン
たちはサンタローズを出発した。

「ねえねえ」

村を出てすぐ、ビアンカが声をかけてきた。その顔には何やら嬉しそうな、それでいてどことなく意地の悪そうな笑みが浮かんでいる。

「どづくつの奥で、おじさんを助けたってほんと？」

「うん。ほんとだよ」

特に嘘をつく理由も見あたらなかったのも、アランは素直に認めた。昨晚のパパスの話もあってか、そこに威張るような仕草はなかった。ビアンカがきよとんとする。

「ほんとにほんと？ わたしてつきり、おじさんがアランを助けたのかと思ってた。それでアランがえっへんって胸をはってるんじゃないかって」

「ひどいよビアンカ」

「えへ。ごめん。でも本当みたいだね、さっきの話。うん、すごいよアラン！」

今度は手放しで誉めてくれた。満面の笑みを見ると、今更ながらに恥ずかしくなる。

それからしばらく、アランとビアンカは洞窟での話や、そこでアランが手に入れた『かしの杖』の話で盛り上がった。子どもたち二人が仲良くおしゃべりしている様子を見て、二人の親は頬を緩めた。ふと、アランやビアンカには聞こえない声でおかみさんがつぶやく。

「これは将来が楽しみだねえ、ふたりとも」

「ん？ 楽しみ、とは？」

「大きくなったら立派で格好いい子に育つよ、アランは。親の私が言うのも何だが、うちのビアンカもあれで結構な器量よしだ。大きくなって、ふたりがずっと一緒になってくれたら私も安心なんだがねえ」

「はは。まだまだ先の話ですぞ」

「おや。子どもの成長なんか、親が考えるよりずっと早いものだよ。今から将来のことを考えたって、バチなんか当たりやしなさいさね」

「むう……」

想像したのだろう。パパスの表情が複雑なものになった。

「確かに伴侶を持つことはとても大切なことだ。だが私はひとところに腰を落ち着けぬ身。おそらくアランも同様だろう。いかに仲がよいとは言え、それは相手にとってつらい思いをさせることにはならないだろうか」

「何を言ってるんだい。そういうのは余計なお世話っていうんだよ。パパスさん」

「むむう」

「そんなに難しく考えなくたって、なるようになるもんさ。もしかしたら相手だつて喜んで付いていくかも知れないじゃないか。大切なのはお互いの気持ちさ。ま、ビアンカはあれで結構なお転婆娘だから、トラブルや冒険にはむしろ目の色輝かせるかもしれないがねえ」

「おかみさん……」

「というわけでパパスさん。そのときはうちのビアンカをよろしく頼むよ」

ばん、と派手に背中を叩かれ、パパスは呻いた。

その様子を二人の子どもは不思議そうに眺めていた。

15・アルカパ、猫の瞳

「アルカパだーっ。お母さん、早く早く！」

「ビアンカ。あんまり急ぐと転ぶよ」

「お父さんに早くお薬持って行ってあげなきゃ！」

草原の先、サンタローズと同じように森に囲まれた場所にアルカパはあった。先に行くビアンカたちの後ろ姿を見ながら、パパスがつぶやく。

「ビアンカは心優しい子なのだな」

「うん。ビアンカはやさしいよ」

アランがうなずくと、なぜかパパスは苦笑を浮かべた。首を傾げるアランに、パパスは「何でもない」と答えた。

街に入ると、綺麗に整備されたレンガ造りの道がまっすぐに延びていた。道沿いの建物はみな立派な造りで、サンタローズと比べるととても大きな街だということがわかった。アランは素直に驚く。

「すごいね、アルカパって」

「うむ。この辺りでは一番大きな街だろう」

「ここよりもっと大きなまちがあるの？」

「あるさ。少し遠いが、ラインハットはここよりもさらに大きい。

世界にはまだまだたくさん街があるのだ」

「うわあ……。僕もいつかいきたいなあ……」

物珍しさからアランはきよるきよると辺りを見回す。晴れ渡った空から降りてくる風は心地よく、歩きたびにこつこつと鳴る石畳が楽しくて、アランは笑いながらスキップをしていた。

しばらく歩くと、突き当たり大きな建物が見えてきた。周囲の建物が二、三軒入ってしまいそうな程の大きさだ。アランは思わず立ち止まり、口をあんぐりと開けた。

「あれがビアンカのご両親が開いている宿屋だ」

「えっ!? あれがビアンカのおうち!？」

「待たせては申し訳ない。急ぐぞ、アラン」

「パパスに連れられ、扉をくぐる。初めて聞くような重厚な音がした。」

建物の中に一歩踏み入れた途端、外とは違う空気がアランの肌に触れた。どこか暖かみがある、不思議な感覚だった。

受付カウンターを横切り、奥にある部屋へと向かう。そこがビアンカたち家族の居室だった。入ってすぐ、ビアンカがパパスたちを奥へと案内する。

「いま、お母さんがお薬をあげています。おはなしもできますよって、お父さんが」

「うむ。ありがとう」

ビアンカの案内で寝室に入る。おかみさんに介抱され、宿屋の主人が横になっていた。

「ごほ……おお! パパスじゃないか……ごほごほ」

「ほらあんた。まだ薬を飲んだばかりなんだから、安静にしてな」
「ダンカン。具合はどうだ？」

「なに、ただのカゼさ。心配かけてすまなかったな……ごほごほっ」
「ウチのひと、気は大きいのに身体が弱くてねえ。まったく情けない」

「はは。しかし大事ではなくて安心した。サントローズの薬はよく効く。おかみさんの言うとおり、安静にしているのがいいだろう」

「ごほ。それよりパパス、今度の旅の話聞かせてくれないか」

旧知の仲なのか、話が盛り上がるパパスたち。邪魔をしては悪いとアランはそっと寝室を出た。同じように部屋の外で大人しく待っていたビアンカと顔を合わせる。彼女は肩をすくめた。

「やっぱり、大人たちのお話ってながいのよね」

「うん。でもしかたないよ。ひさしぶりに会ったんだから」

「お父さん、寝込んでからはあんまり笑わなかったけど、いまはとっつてもうれしそう。だからそっとしてあげましょ。……あ、そうだ。」

アラン」

ビアンカが手を合わせる。

「もしお外に行くなら、いつしよに行きましょう。アルカパの街を案内してあげる」

「え？ ほんと？」

「うん。お薬のお礼もしなきゃ」

満面の笑顔を見せるビアンカに、アランは喜んでうなずいた。

金髪のお下げが歩く度にびよこびよこ揺れる。

ビアンカの後ろを歩くのは楽しい。色んなものが新しく見える

「？ どうしたのアラン」

「ううん。何でもないよ」

振り返ったビアンカにアランは手を振って見せた。まさかビアンカの後ろ頭を見ながら楽しんでいたとは言えない。

もちろん、それ以外にもアランにとってアルカパの街は十分に新鮮だった。

まず、街を歩く人の数が違う。サンタローズも季節によって村人の服装は変化するが、アルカパの人々は色とりどりの服を身に付けていた。だが、毒々しいほどの派手さはない。品がある、とでも言うか。旅人も訪れるのだろう。時折、鎧兜に身を包んだ大男も通る。

建物の大きさはすでに目抜き通りで体験済みだが、よくよく見ると建物の大きさもさまざまだ。平屋建て、窓も少ししかないこじんまりした家もあれば、大きな煙突からぽっぽつと煙を出し続ける家もある。もちろん、ビアンカの家である宿屋が街の中で一番大きい。そして何よりアランが驚くのが、道ばたに植えられた綺麗な花々の数だ。特に街の中心部にある教会の周囲には、教会をぐるりと囲むように色とりどりの花が植えられている。春の陽気に似つかわし

くない寒さに襲われているのはアルカパでも同じはずだが、少なくとも見た目においては寒々しさとは無縁だった。

都会都会しているわけではなく、さりとて寒風吹きすさぶ田舎でもない。不思議な調和を保った街だった。

道具屋、武器屋などを冷やかし、教会のおじいさんの長い話に苦笑いを浮かべ、酒屋のお姉さんに「逢い引きだ」とよくわからない単語を言われながら、アランはすっかりこの街に魅せられていた。

だが 街の南にある小さな広場にさしかかったとき、初めてうきうきした気持ちにかげりが差した。

猫が唸り声を上げている。明らかに警戒し、威嚇する声だった。

アランと同じか、それより少し年上の少年が二人、猫を取り囲んでいた。彼らは手に持った棒で猫を突っついていて、猫はさかんに威嚇の唸りを上げているが、いかんせん身体が小さい上、弱っているのか声自体に力がない。首に巻かれたひもが広場に突き立てられた棒に繋がれ、身動きが取れないようだった。

彼らの姿を見た途端、ビアンカが声を張り上げた。

「こらあつ！ 何やってんの！」

「げ、ビアンカ!?!」

少年の一人がびくりと肩を震わせる。それに構わずビアンカはずかずかと彼らの側まで近づいた。びしり！ と眼前に指を突きつける。

「そんな可愛い猫さんいじめて、何が楽しいの！」

「いや、だつてなあ」

「こいつ、面白い声で鳴くんだけ」

言うが早いか、少年が棒で猫をつつく。すると「ふがなあおう…」という鳴き声が漏れる。

やめなさい、とビアンカが言うより早く、アランは少年から棒をひったくった。むっとする少年を真正面から睨む。少し相手がひるんだ。その様子をビアンカが驚いた表情で見つめる。

アランは猫に目を向けた。どこかで迷ったのか、身体は泥だらけ、

毛並みは乱れ放題、身体もどこかげっそりしている。

だがアランは眉をしかめることもせず、ただじっと猫を見つめた。猫もまたまっすぐにアランを見返す。

綺麗な目だな、とアランは思った。心の中で語りかける。

君は、誰？

どこから来たの？

僕と友達になれるかな？

「……アラン？」

ビアンカに声をかけられ、我に返る。猫との間に少年たちが割り込んだ。

「と、とにかくこいつは俺たちが見つけたんだ。俺たちのだ」

「何言っているのよ。いまスグはなしなさい！」

「えー……」

「うーん。じゃあ、こうしようぜ！」

いかにも名案、という風に少年が手を叩く。

「お化け退治さ！」

「え？」

「アルカパの北にお城があるのは知ってるだろ？ そこに出るんだつてさ。夜な夜なお化けがさ。そいつらを追いはらったら、この猫はあげるよ！」

「それはいいな！ お化け退治だ、お化け退治！」

「い、いいわよ。そのかわり、お化けを退治できたらちゃんと猫ちゃんにはなしてあげるのよ！」

「うん。わかった」

売り言葉に買い言葉か、ビアンカが怒り心頭に宣言した、その脇で。

アランはじっと、猫の瞳を見つめていた。猫もまた唸り声を上げるのをやめ、じっとアランを見つめていた。

ほら、行くよ とビアンカに襟首をつかまれ、引っ張られる。

去り際、猫が「なおん……」と小さく鳴く声が聞こえた。

16・夜の大草原へ

襟を引っ張られるままだったアランは、ふとビアンカが宿とは反対方向に歩き出したことに気付いて声を出した。

「ビアンカ、もしかして今からいくつもり？」

「決まっているじゃない！ 猫ちゃんを助けなきゃ！」

「それは、そうだけど……」

アランは言葉を濁した。怖じ気づいたわけではない。ただサンタローズでの洞窟探検の経験が、そのまま何の備えもなくお化けがいるという場所へ向かうことにためらいを感じさせたのだ。

ただ、アランも正直なところはビアンカと同じ気持ちだ。あの子を助けたいと思う。それも、とても強く。

「おや、おふたりさん。どこへ行こうというんだい？」

街の出入り口まで来たところで、門番の兵が声をかけてきた。さりげなくアランたちの行く手を塞いでいる。ビアンカは両手を腰に当てて声を荒げた。

「猫ちゃんを助けるの！ ここを通して、門番のおじさん！」

「何を言っているのかよくわからないが、外は危険だ。子どもふたりだけで外へ出すわけにはいかないな。さあ、お家に帰りなさい」
「やんわりとした口調ながら、断固として通そうとしない。サンタローズのおじさんとは全然違うなとアランは思った。

「ううー」と隣でビアンカが唸る。すると突然、彼女は駆け出した。あるうことが、門番の股の下をくぐって抜け出そうとする。……が。

「こらこら。レディがそんなことをするのは感心しないな」

ひよい、と首根っこを押さえられ、そのままアランのもとまで連れてこられる。やたらと慣れた手つきだった。

「まったく。相変わらずお転婆だなビアンカちゃん。そんなこと

だと大きくなってお嫁にいけないぞ？」

「ほ、ほうっておいて！」

頬を膨らませてビアンカが言う。顔を赤らめているところを見ると、本人は結構気にしているのかも知れない。

押し問答も効果はなく、ふたりは渋々その場から引き下がった。

「どうしよう……これじゃあ外に出られないわ」

「うーん。大人の人にたのんだらどうだろう？ お父さんと一緒なら、あのおじさんも通してくれるかも」

「ダメよ！ 大人と一緒に化け退治したら、あいつらゼツタイ

猫ちゃんをはなしてくれないわ！ どうせお前らがやつつけたんじゃないだろう、って！」

ビアンカの言うことももつともだったので、アランは黙り込んだ。ふたりして頭を悩ませている内にビアンカの家に通り着く。彼女はため息をついた。

「こうなったら仕方ないわね。アラン」

「なに？」

「今日は何が何でもうちに泊まってもらおうよう、お父さんたちに言ってみる。当然、アランも泊まるでしょ？」

「そうなると思うけど……あ」

あることに思い至ったアランは口元を押さえた。

「まさかビアンカ、夜にこっそりぬけ出すつもりじゃ」

「うん、正解。よくよく考えたら、お化けって夜出るものじゃない？ だったら退治も夜しかできないかなって」

「……そう、だね」

アランはうなずく。二人は真剣な表情で話し合った。

ちょうどそのとき、奥の扉が開きパスたちが出てきた。アランとビアンカの姿を認めると微笑む。

「おお、帰っていたか。すまぬなビアンカ、アランに街を案内してくれていたのだろう？」

「気にしないでください、おじさま。私こそ、とても楽しかったで

す」

「はは。このお礼はまたいずれしなければな。……ではアラン、そろそろサンタローズに帰るとしよう」

パパスの言葉に、アランもビアンカも固まる。何と言おうか二人が悩んでいると、思わぬところから助け船が来た。ビアンカの母親だ。

「そんな！ もう帰っちまうのかい、パパスさん！ 一泊ぐらいしていってくださいな」

「うーむ……」

パパスがちらりとアランを見る。ビアンカに肘でせっつかれたアランは、急いでこくこくとうなずいた。パパスが再び笑う。

「……では、ご厄介になろうか」

「はい！ さあさ、こちらへどうぞ。ちょうど良い部屋が空いているんですよ！」

嬉しそうにパパスとアランを案内するおばさん。パパスに手を引かれ歩き出そうとしたとき、アランの耳元でビアンカがそとつぶやいた。

『それじゃ、夜にね』

『うん。わかった』

外の喧噪が細くなり、やがて消え、夜が来る。

パパスとアランが案内された部屋は、親子二人が寝るには少々広いくらいだった。良い部屋が空いているというおかみさんの言葉は、なるほどその通りだった。

だからこそアランはなかなか落ち着けず、寝台の中でしきりに寝返りを打っていた。

何度目だろうか。パパスに背を向けるように寝返りを打ったとき、入り口の扉がゆっくりと開いた。

「……アラン」

ピアノカがゆっくりと寝台に近づき、声をかけてきた。アランもまた音を立てないように注意しながら床に降り立つ。

アランの手をピアノカが握る。

「さあ、行きましょう。お化け退治に北のお城　レヌール城へ。
猫ちゃんを助けなきゃ」

「うん」

連れだつて部屋を出る寸前、アランは父の寝台を振り返つた。パスは目を覚ます気配がない。ごめんなさい、と心の中で謝る。

すると不意に、父の口から細かい寝言が漏れてきた。

「……マーサ……私たちの……アランは……元気に……」

きゅっ、とアランはピアノカの手を強く握つた。

部屋を出て、慎重に扉を閉める。他の宿泊客やピアノカの両親を起こさないよう、息を潜めて歩く。重い正面扉を開けると、肌を刺すような冷気が吹き付けてくる。

「ううっ……やっぱり夜は少し寒いね」

「……うん」

「……」

無言。やがてピアノカが意を決したように口を開く。

「ねえアラン。さっきのおじさまの寝言……だよな？　マーサって」

「僕のお母さん……だと思っ」

「思っ？」

「お母さんは僕は小さいときにいなくなつちやつたんだ。僕はぜんぜんおぼえてなくて、でもお父さんはお母さんをさがして旅をしているって。ずっと」

「……ごめん！　アラン。私、いけないこと聞いちゃった……」

「ううん」

アランは首を振る。

気まずい空気が流れた。

アランは夜空を見上げた。冷たく、けれど澄み切つた空気の向こ

うには、藍色の空を埋め尽くすほどの星が瞬いていた。

確かに、アランにははつきりとした記憶はない。けれど身体が、心が、薄ぼんやりと母の姿を思い起こさせるのだ。温かい、優しい、そして清らかな母の気配　いのち。

この世界のどこかで母は同じ空を眺めているのだろうか。いつか、パパスとともに再会することができるだろうか。

いや　きつとできる。

パパスが探し求め、そして母が自分の思うとおりの人ならば、いつか必ず

「ありがとう、ビアンカ。でも僕はだいじょうぶだよ。……それより、僕が昼間言ったことおぼえてる？」

「え？」

「お化け退治するならきちんと装備をととのえてから行こうって話」
気分を入れ替え、アランは懐から財布を取り出した。そこにはサントローズの洞窟で得たお金コルトが詰まっていた。ビアンカが「わあ」と声を出す。

「これで買い物しようよ。お店が開いているか、わからないけど……」

「街の人は働き者だから、まだ大丈夫だと思うよ」

それから二人は武器屋、防具屋、道具屋を見て回った。アランの手持ちは少なかったからろくな買い物はできなかったし、何よりこんな時間に子ども二人で出歩く姿にお店の人は驚いていたが、ビアンカが持ち前の大胆さで無理矢理納得させてしまった。

「何だか本当の旅に出るみたいだね」

ビアンカが言う。浮かれているのか、声が弾んでいる。

アランはうなずき、それから自らの腰に手をやった。

そこには真新しい『銅の剣』が鞘に収められていた。スライムにもらった『かしの杖』を手放すのは気が引けたが、これから向かう先のことを考えて思い切って購入した。

ついに自分も父と同じ『剣』を持つ　そう考えると首の後ろが

ふつつつと沸き立つような錯覚を抱く。

ちなみに隣のビアンカは『くだものナイフ』を持っている。「本当は『いばらのムチ』が欲しかった」と彼女はぼやくが、お金が無い以上高望みはできない。

夜のアルカパの目抜き通りに人の姿はほとんどなかった。時折、酒場の方へ向かう男たちとすれ違ってくるくらいだ。その先、街の出入り口にさしかかると、そこには昼間と同じ門番の男がいた。

ただし 木の幹にもたれて居眠りをしている。

「この寒いなか、よく居眠りができるね。まじめなのか、ふまじめなのか、よくわからないわ」

ビアンカが呆れた声を出す。二人はそっと、門番の男の脇を通った。

街を出る。森と、草原と、遙か先には高い山々と、それらすべてを覆い尽くす広大な夜空が広がっていた。

ビアンカが拳を握る。

「待っててね、猫ちゃん。私たちが必ず助けてあげるから……いざ、レヌール城へ！」

17・油断の毒

夜空の下、意気盛んに出発したアランとビアンカ。

しかし、道中はそう簡単にはいかなかった。

暗い夜道を子ども二人で旅をすること自体がまず難事だ。満天の星である程度の明かりは確保できるとは言え、一步森の中に入るとそこは一寸先も見通せぬ闇が広がる。自然、見晴らしの良い、拓けた草原を歩くことになるが、何もなかった広い空間を二人だけで進むのは、それはそれで勇気が必要だった。

そして何より危険なのが、道すがら遭遇するモンスターたちだ。草原で一度に出会うモンスターの数は少ない。だが夜ということもあってか、彼らは普段より好戦的だった。

勝ち気だが、モンスターとの戦闘自体にはまったく不慣れなビアンカをかばいつつ、アランは銅の剣を何度もふるった。初めは扱いに苦労した剣も、何度も戦闘を重ねる内次第に手に馴染んできた。初めて銅の剣を握ったときの高揚感とはまた違った感覚が、アランの中で芽生えつつあった。

そして、何度目かの戦闘のときである。

「アラン！ どいてっ！」

突然、ビアンカが声を上げた。ちょうどモンスターの一体を斬り伏せたアランは振り返る。

ビアンカの指先に、松明の炎のような赤い光が集まっていた。

「、、いくよっ。メラ！」

攻撃呪文。

小さな火の玉がビアンカの指先から光の尾を引いて飛翔する。慌てて飛び退けたアランの脇を通り、今まさに飛びかかろうとしていた『おおねずみ』に直撃した。

炸裂音が夜の空気を切り裂く。

そのまま吹き飛んだ『おおねずみ』は、黒煙を上げて消えていった。

瞠目しながらアランがビアンカを見ると、彼女は照れたように頬をかいていた。

「えへへ。はじめての呪文、上手くできたかな？」

「うん……うん！　すごいよ、ビアンカ！」

アランは素直に驚き、そして喜んだ。アランは使えるのは回復系の呪文だけで、いまだ攻撃呪文のひとつも使えない。だがビアンカは、アランより戦闘の経験が少ないのに、もう立派な攻撃呪文を使えるようになっていいる。羨ましいというよりも、「すごい！」という気持ちの方が勝った。

アランの言葉を受けて、ビアンカははにかんだ。

「ありがとう。でもアランこそすごいよ。怪我しても、すぐにホイミで治してくれるもん」

そう言って、満面の笑みを浮かべるビアンカ。

そう。

このとき二人は、完全に油断してしまっていた。

風船から空気が抜けるような音が、耳に届く。ビアンカが何事かと振り返る。

アランは慌てて叫んだ。

「ビアンカ、危ない！」

直後、ビアンカに向かって緑色の『何か』が体当たりした。

じゅあっ、という音が響く。

「きゃあああっ！」

「ビアンカ！」

アランは剣を構えて走った。

ビアンカに攻撃をしかけた『何か』

緑色の崩れた身体を持つ

たモンスター、『バブルスライム』だ。

『バブルスライム』はビアンカからするすると離れると、今度は

アランに向かつて体当たりをしてくる。アランは走る勢いのまま、その不定形の身体に銅の剣を叩き付けた。

体当たりをそのまま迎撃された『バブルスライム』は水風船のようカウンターに弾け、霧となって消えていった。

ビアンカが膝から崩れ落ちる。

アランは無我夢中でビアンカを抱き留めた。

「ビアンカ、ビアンカ！　しっかりして！」

「……」

返事がない。気絶しているようだった。

しかも顔色がひどく悪い。頬の辺りが真っ青になっている。首筋には汗が浮かび、身体を支えるアランの手を湿らせた。

「……まさか、毒!？」

パパスから聞いたことがある。『バブルスライム』など一部のモンスターは、その攻撃で相手に毒を与えることができる。

のんびりはしていられない。アランは息を整え、ビアンカの額に手を当てた。ゆっくりと呪文を唱える。

「、キアリー」

光の粒子が舞い、ビアンカに吸い込まれていく。

すう……、とビアンカの息づかいが穏やかになった。顔色も元の瑞々しい肌色に戻っていく。だが、彼女が目を覚ます様子はない。

重ねてホイミをかけようとして、アランは自らの精神力が切れかかっていることに気付いた。

このまま先に進むのはダメだ　アランはビアンカを背に、いったんアルカパへと戻ることにした。

18・そのときに向けて

アルカパの街が見えてきた。アランはほっと息を吐こうとしたが、ここまでビアンカを背負ってきたせいかわい呼吸しか漏れなかった。「う……うん……」

「ビアンカ!? 気がついた?」

「アラン……? あれ、私」

アランの背中でビアンカが目をしばたたかせる。アランは手短かに経緯を説明した。話を聞いた彼女は少しだけ顔を青ざめさせ、やがて神妙な声で「……自分で歩く。ありがとう」と言った。

しばらく無言のまま、二人並んで歩く。アルカパの街に入り、相変わらず大胆な寝相の門番の脇を通り、宿の扉の前に辿り着くまでビアンカは口を閉ざしていた。

アランはビアンカを気遣った。

「だいじょうぶ? ビアンカ」

「……うん。ごめんねアラン。迷惑かけちゃった」

「いいよ」

「ごめん。痛いとか、お城に行くのが嫌になったとか、そういうのじゃないんだ。だけど、ちょっと……ダメだったなあ私、ってさ」「珍しく落ち込んだ様子の彼女にアランも困り顔をする。こういうときのように声をかければいいのかわからなかった。

しかし、やはりビアンカはビアンカだった。

扉に向かい合い、大きく深呼吸。家主を起こさないようにゆっくりと扉を開ける。ちょうど席を空けていたのが、受付カウンターに人の姿はなかった。それを確認し、アランを振り返ったときにはもう、彼女の顔には笑顔が浮かんでいた。

「今日はここまでにしましょ! いろいろあつて疲れちゃった」

「うん」

「ねえアラン、明日少し付き合ってもらえる？」

「どうしたの？」

「いや、レヌール城に行くために、もっといろいろ準備しておきたいなと思って。今日の冒険でお金もたまったことだし」

むん、と気合を入れるように拳を握りしめるビアンカ。

「やっぱり冒険は楽しいことばかりじゃないよね。あぶないこともあるんだ。だから私、がんばるよ。かならず猫さんをたすける。そのためにはもっとがんばらなきゃいけないんだ！」

「ビアンカ……」

「協力してくれる、アラン？」

少しだけ不安そうにこちらを見てくるビアンカに、アランは笑顔で「もちろん」とうなずいた。

翌日。

アランとビアンカは連れだって街へ出かけ、昨夜獲得した資金を使って装備や道具類を整え始めた。一晚経ってすっかり元気を取り戻したビアンカは、念願の『いばらのムチ』を手に入れてご機嫌だった。

宿で早めに休み、夜には街を抜け出す。二人は街の周辺で念入りに戦い方を確認した。素人で、しかも子どものやることではあったが、アランには洞窟での冒険で一日の長がある。ふたりで協力して戦うためにも、戦闘の訓練は必要だった。

そうしてある程度の経験を積んで、早めに切り上げる。さらに夜が明けてから、手が届かなかった分の装備を購入する。同時にレヌール城についての噂をふたりで手分けして集めた。それによると、どうやら城にお化けが棲みついたのは最近のことらしく、夜な夜なすすり泣くような声が聞こえてくることだった。

こうして、瞬く間に時間は過ぎていく。

本来短期滞在のはずのアランたちがこうまで長くアルカパに滞在できたのは理由があった。

「ぶえつくしよっい！ うう……ブルブル」

アランが宿の部屋に戻ると、パパスが寝台に横になったまま盛大にくしゃみをしていた。ビアンカの父、ダンカンの風邪をうつされてしまい、寝込んでしまったのだ。

「お父さん。だいじょうぶ？」

「うう……情けない。アラン、うつすといけないからあまり近づいてはいけない」

「今お薬取ってくるね」

そう言っただ階下へ降りる。ダンカン夫妻に薬の件を伝えると、残った薬を快く分けてくれた。ダンカンの調子はかなり良くなっていて、寝台から起き上がれるほどに快復していた。

薬を抱え、部屋を出る。そのときビアンカとすれ違った。

真剣な表情で、うなずきをかわす。

『じゃあ、また夜に。迎えに行くから』

『いよいよだね』

そう

今夜、ついに二人はレヌール城へ乗り込むことに決めたのだ。

19・レヌール城最上階

この日の風は、いつもより少し冷たく感じた。

「……………行ってきます」

振り返り、アランはつぶやく。視線の先には月と星々の光に照らされ、アルカパの街が静かに眠っている。

「アラン、もつと元気に行きましょう。私たち、猫ちゃんをたすけに行くんだから。だいじょぶ、私たちにはできるよ」

「うん。そうだね。行こう、ビアンカ」

背筋を伸ばし、アランとビアンカは肩を並べて歩き始めた。

草原を横切り。

森を抜け。

高い山々を横手に見ながらひたすら歩く。

そしてついに、高台に立つ古城が見えてきた。

最初に異変に気付いたのはビアンカだった。

「ねえ……………あのお城の空だけ、ものすごく暗くない……………？」

アランは顔を上げた。木々の間からのぞくレヌール城、その上空には夜空よりもさらに暗い雲が厚く覆っていた。時折白い稲光いなびかりが雲の表面を走っている。

レヌール城の正門を前にしたときには、明かりだけでなく気温すらもさらに低下したような錯覚をアランたちは抱いた。勇気を振り絞り、ふたりは入り口の大扉の前に立つ。

さび付いてがさがさする鉄扉を、二人で力を合わせて押し開ける。
が。

「……………あかない」

「びくともしないわ。どうしましょう」

手についたさびを嫌そうに拭いながら、ビアンカが途方に暮れたように言う。アランは辺りを見回した。

「これだけ大きなお城だもの。きつとほかに入り口があるはずだよ」
「そうね。手分けして」

言いかけ、ビアンカはふと後ろを振り返る。何も無いことを確認して「ふう……」と息を吐き、恥ずかしそうに笑う。

「手分けしないで、いっしょに探しましょ？」

「うん」

正面玄関から離れた二人は、とりあえず外壁に沿って歩き始めた。城を取り囲む高い塀との間を慎重に進みながら、アランたちは城の裏手に回った。

「あ！ あれ見て。階段じゃないかしら」

ビアンカが指差す先に螺旋状の階段があった。どこに続いているのかと二人して階段の先を目でたどる。どんどん首が上を向き、やがてほとんど雲を見上げるほどになったとき、ようやく階段が終わっていることに気付く。

どうやら城の最上部まで続いているようだ。

ひととき強く風が吹く。木々が鳴った。ビアンカがぎゅっと袖を握ってきた。

「……高いね」

「あの子をたすけるためにはのぼらないとだね、ビアンカ。でも」

「でも？」

「……何だかこのお城、ヘンだよ」

瞬間、稲光が走った。空気を引き裂く音が耳を通り越してお腹の辺りまで響く。

ビアンカが震える声を出した。

「アラン、何てこと言うのよお。もうバカッ」

「ご、ごめん。だけど、いかなきゃ。ほら、ビアンカ」

ビアンカの手を引き、アランは階段を上り始めた。一本の太く大きな柱に石板を突き刺したような螺旋階段で、眼下の光景を足元から見る事ができた。上がれば上がるほど風は強まり、一段上ろうと上げた足が風に取りられそうになる。何かにしがみつこうにも、手

すりは今にも朽ち果てそうでもよりかかることなどできない。
空は絶え間なく鳴動している。「ごおん、ごごおん、と雲の中で
雷が鳴っていた。

時間をかけて、ようやく二人は最上部に辿り着く。

まるでアランたちを招くように、ぽつかりと入り口が開いていた。
その先は真つ暗だ。

二人は意を決し、武器を構えた。慎重に入り口から中に入る。

ふっ……と周囲が暗くなる。

足裏が固い石畳から、柔らかい何か 絨毯を踏んだ。

直後、背後で金属の擦れる大きな音が響いた。入り口の鉄格子が
ひとりでに降りたのだ。

ただでさえ暗い視界がさらに漆黒に染まった。

「……！」

アランは産毛が逆立つ気配を感じた。前から、後ろから、横から
周囲すべてから、得体の知れない気配が迫ってくる。

繋いでいたビアンカの手が、すうっ、と遠のいた。

「きゃああああああっ！」

「ビアンカツ!？」

耳をつんざく悲鳴。まぎれもなくビアンカの声は、しかしすぐに
立ち消えた。

部屋が急に明るくなる。壁にしつらえられた松明がひとりで火
を放ったのだ。

アランは立ち尽くす。

棺がずらりと並んでいた。そのすべてのふたが開いている。

ビアンカの姿はどこにもなかった。

20・動かぬ石像

「ビアンカ、ビアンカ!？」

呼ぶ。だが返事はない。

部屋の隅に溜まった闇に声が吸い込まれていくようだ。アランは勇気を振り絞り、開いたままになっている棺をひとつひとつ見て回った。

松明の光に照らされ、空中に舞う埃が見える。棺の中は例外なく空っぽで、蜘蛛の巣がはっついていて、何より血のように真っ赤だった。部屋の奥　ひとつだけ、下に降りる階段がある。

松明の光が微妙に届かないそこは、まるで奈落の底に続いているかのようなものである。声はしない。代わりに、かすかに、ほんのかすかに風の通る音がする。

『銅の剣』を握りしめ、アランは階段の一段目に足を置いた。こつ……という音がはつきりと耳に届く。手すりを握りながら、ゆつくりと降りた。

心なしか、呼吸をするのが、苦しい。

下の階も松明が燃えている。人影など皆無　やはりここも、ひとりでに明かりが灯ったのだ。幽霊が居着いているという噂は、どうやら本当なのだろう。

左右を見回しながら、アランはビアンカの姿を探した。本当に幽霊がいるのなら、そして、彼女がそいつらに連れ去られてしまったのなら　悪い想像を振り払い、アランはひたすら歩いた。

「……?」

ふと、振り返る。

埃が溜まった床の上に点々と自分の足あとが付いているだけで、背後には誰もいない。大きな石像が通路を挟むように立っているだ

けだ。明かりはあるのに、闇は濃い。

アランは再び歩き出した。

こつん……ごりりいっ……

「……っ!？」

再び振り返る。今度は身体ごと、剣を構えながら、だ。

石像が『こちらを向いていた』。

アランは思わず唾を飲み込み、一步、二歩と後退る。

石像は動かない。穴の開いた目で、じっとこちらを見ているだけだ。だけど、あの目はさつきまでは確かに別の方向を向いていた。

横目に扉の姿を捉える。

ゆつくりと、ゆつくりとそちらへ向かった。視線はまだ、石像と合わせたままだ。

石像は 動かない。

いま気付く。石像が握っている剣。あれは石ではない。本物の鉄だ。松明の光が、そこだけ妙に眩く反射している。

石像は動かない。だが 視線はずっと、アランを向いていた。

手が、扉の取っ手に触れる。握った。回す。がちゃん……と音がして、開く。

冷たい風が流れ込んできた。室内とはまた違った闇が扉の隙間からぞく。

アランは一気に扉を開けその奥に身体を滑り込ませると、そのまま叩き付けるように扉を閉めた。耳鳴りがした。あまりにも静かな緊張感に、額に汗をかいていた。

雷鳴がとどろく。

背筋が凍るほど驚きながら、アランはふと、どこからか漏れてくる小さな声を聞いた。

『……うん……うーん』

「……ビアンカ？」

聞き間違えではない。ビアンカの声だ。うなされているような、苦しげな声だ。

周囲を見回す。そこでまた、冷や汗をかいた。そこは城の屋上に設けられた 墓場だった。雷鳴に邪魔をされながら、アランは声のもとをたどる。するとひととき大きな二つの墓から声が漏れていることを突き止めた。墓石に耳を当て、ビアンカの声を確認すると、アランは意を決して蓋をはずした。重い石板が、腹に響く低音を上げながらずれていく。

半分ほど開いたところで

「……ビアンカ！」

「ぶはあっ！ ああ、アラン！」

ビアンカが勢いよく飛び出してきた。

「よかった、ぶじだったんだね」

「すー、はー、すー、はああ……。うん、ありがと。たすけてくれて。とても息苦しくて、しぬかと思っちゃったわ。もうちょっと早く来てくれるとうれしかったのに」

ビアンカの言葉に目を瞠る。意外なほどあっけらかんとしているなど思ったアランだったが、よく見るとビアンカの肩が細かく震えていた。そのときの恐怖を表すように、ビアンカの表情が徐々に沈んでいく。

「あのとき、とつぜん真っ暗になったと思ったらふつと身体が軽くなって。誰かに抱えられているんだって思ったけど、全然姿が見えなくて……。気がついたらあの中になら。ねえ、アラン。やっぱりここ、お化けがいる……。んだよね？」

「……うん」

「……」

しばらくふたり、無言になった。

風が、冷たい。

自らの身体を抱くビアンカに、アランは手を差し伸べた。

「いこう、ふたりで。こんどは必ず、僕がビアンカを守るから」

「アラン……」

しぶやへアマンカに、アマンは元気づけるように笑いかけて見せた。

21・レヌール城主の間

ビアンカを手をしっかりと握り、再び扉をくぐって城の中へ入る。

「……どうしたの？ アラン」

「……うん。何でもない」

両脇に鎮座する石像に目をやりながらアランは短く答えた。

石像の顔の向きが戻っていた。

いくぶん早足に廊下を歩く。突き当たりにさらに階段があった。煙でも充満しているのかと思えるほど、その先は真っ暗であった。

下りる。

床に足を置いたときには、すでに隣にいるビアンカの姿すら見えなくなっていた。

「……真っ暗だわ。アラン、気をつけてね」

「うん」

さらに強くお互いの手を握りしめ、アランたちは一步一步前に進んでいく。だが周囲を完全な闇に包まれていると、次第に自分がどちらの方向に歩いているのかすらわからなくなってきた。

闇はまるで粘土のようにアランたちに絡みつく。

ぎし……

きい……

意識しなくても、周囲の微かな音が耳に入ってくる。

何とか壁伝いに向かいの扉まで辿り着いたときには、ふたりともすっかり疲弊していた。

だがレヌール城の怪異はそれだけでは終わらない。

「あら」

扉を開け、光のある部屋に入ったとき、ビアンカが目をこすった。

「いま、あそこに誰かがいたような」

指差す先にはさらに階段があった。どうやらこの城は各階を繋ぐ階段が至る所に設置されているらしい。だがアランが目を凝らしても、そこに人影は見えなかった。

意を決し、階段へ向かう。そこは他と違い、造りが豪華なものだった。螺旋状に上へと続いている。埃の舞う絨毯を踏みしめながら、アランたちは階段を上りきった。

長く、広い廊下が目の前に続く。

「……まるで王様のお部屋みたい。このお城の持ち主さんがいたのかな……？」

ビアンカのつぶやきを耳に、廊下を歩く。その途中、大きな扉のある部屋の前に来た。

物音が、する。

しかも床がきしむような類の音ではない　人の声だ。

泣いている。

息を呑むビアンカの前で、アランは扉に手をかけた。

「ちょ、ちよつとアラン！」

制止を振り切り、部屋の中へと入る。

橙色の灯火がアランたちを包む。とても大きな室内だった。埃を被ってはいるが、調度品はどれもこれも立派な拵こしらえで、一目見ただけでもここが身分の高い人の居室だったことがわかる。

恐怖も忘れ感嘆の声を上げるビアンカを背に、アランは何気なく部屋の奥を見た。

「……っ！」

悲鳴を飲み込む。

ソファアーの上に、女性がひとり静かに腰をかけていた。まっすぐにアランたちを見つめている。その顔には涙の跡があった。まるで息を吹けば散り散りに消えてしまいそうなほど儚げで

実際に、身体が透けていた。

ビアンカも気付き、アランの服の裾を握る。その手を握り、アランは女性のところへと歩み寄った。女性はこちらを見つめ続けてい

る。アランは恐怖よりも強く、「何とかしなきゃ」と思った。彼女の目があまりにも哀しそうで、つらそうだったから。

声をかけようとしたその瞬間

ふい……と女性が顔を逸らした。

代わりに指で、どこかを指し示す。

そしてそのまま音もなく消えていった。

「あ……」

「お化けさん……だよな？ でも何だか、とっつてもかなしそうだったよ」

「うん。僕もそう思った。何でなんだろう。お化けて、もっと怖いものだと思っていたのに、あの人は、なにかがう感じだった」

「それにさっき、どこかを指差していたよね」

アランとビアンカは顔を見合わせた。

そして二人同時に、同じ方向を見る。

壁の向こう 廊下の奥。女性の指は、この部屋のさらに先を示していた。

22・エリックの願い

部屋を出た二人は、さらに廊下の奥を目指した。あの女性の幽霊が指し示した先に、何かがあると思ったのだ。

「けほ、けほ」

ビアンカが咳き込む。「何だか空気が重いね」と彼女は言った。それはアランも感じていたことだった。足元と天井の両方から、淀んだ気配が漂ってくる。

突き当たりに扉があった。ゆっくりと開ける。

「……？」

最初、それが何なのかアランにはわからなかった。

目の前に広がる赤くて白くてふわふわしたもの。目を凝らしても形が曖昧で、煙のようにぼやけた何か。

やがてそれが豪華な服であると気付き、それを身に付けているのが恰幅の良い男だと気付き、さらには男が目の前に『浮遊』していることに気付いて悲鳴を上げた。

「うわあっ!？」

「きゃあっ!？」

ビアンカも同時に声を上げる。すると男は滑るように部屋の奥へと飛んでいった。

奥の扉を『すり抜ける』。

呆然と立ち尽くすアランたちは、やがて各々の武器を取った。唾を飲み込み、一步踏み出す。あれがこの城の幽霊の親玉か。二人は無言でうなずきあった。

さつきよりもずつと慎重に扉の前に立つ。そつと押し出すように扉を開いた。途端、強い風がアランとビアンカの脇を走る。

そこはベランダになっていた。城の外壁に沿うようにゆるやかなスロープを描いて上へと続いている。

突き当たりに、さきほどの男が浮かんで待っていた。

恐る恐る、二人は男の前に立つ。武器を構え、その切っ先を向けると、男はどういうわけか感心したような声を出した。

『おお。勇気のある子どもたちじゃ。まさかここまで付いてくるとは』

「え？」

予想外の言葉にアランの手が止まる。すると男は満足そうに何度もうなずいた。

『わしはこのレヌール城の主、エリック。……といっても、ご覧の通りの有様。もう死んでからずいぶんと経つ』

「あるじ？」

「じゃあレヌール城のお化けの正体は、おじさま？」

『いや』

ビアンカの問いかけに、レヌール城主は小さく、しかしはつきりと否定した。

『少し前からこの城に親分ゴーストとやらが棲みつきはじめてな。

わしや后のち、それにこの城に眠る多くの使用人たちは奴らに縛られ、

安らかに眠ることができなくなった。今もなお、下の階ではゴースト

たちが好き勝手にしている。みな、ほとほと困っておったのだ』

「じゃあ、噂で聞いた『人が泣く声』って」

『我が后を含め、囚われた霊たちには女性も多い。彼女らの悲痛の叫びが君たちの住む場所まで届いたのだろう。それは申し訳ないと思っている。だが、わしらとしてはどうしようもないのだ』

沈鬱なエリックの表情にアランとビアンカは口を閉ざす。

すると突然、エリックが目前に近づいてきた。

『そこでだ君たち。噂があるにもかかわらずこの城までやってきて、なおかつこんな奥までたどり着けた君たちの勇気と力を見込んで、ひとつ頼まれてくれないか！』

「わわっ！？」

『親分ゴースト！こいつさえ倒すことができれば、他の子分たち

も諦めて出て行くだろう。そうすればわしらは安心して眠りに入ることが出来る！」

「え、えっと？」

『だいじょうぶだ！ 君たちはまだ小さいが、その勇氣は本物であるとわしは信じる。きつと親分ゴーストを退けることも可能だろう！ 頼まれてくれないか！ な！』

「あ、あの。エリックさん、ちょっと近すぎ……」
『な！』

うう……と困惑の声をあげるアランとビアンカ。しかしエリックは一向に引く気配がない。このままではエリックに身体を乗っ取られるか、さもなければ呪われてしまいそうな勢いだった。

やがて腹を決めたのか、ビアンカが拳を握った。

「おちついて、エリックおじさま。わたしたち、この城のお化けを退治しにきたの。おじさまの言うように悪いお化けがいるのなら、わたしたちがやっつけるから」

「うん」

アランもうなずく。するとエリックは大げさなほどに喜んだ。

『そうか、そうかそうか！ いやありがとっ！ 親分ゴーストはこの城の最上階にいる。ただその部屋に行くためには一度一階まで下りなければならぬのだ。さあ、こちらへ来たまえ』

ふわふわ、とアランたちの頭上を越えてエリックが扉の前に降り立つ。

『この城の厨房にたいまつがある。ただのたいまつではないぞ。わしらの生きていた頃、儀式用に使っていた聖なるたいまつだ。それを使えば、途中の階にある不自然な闇も祓うことができるだろう』
厨房は地下にある、とエリックは付け加えた。ところが一向に動こうとしない彼に、アランは念のため尋ねる。

「あの、せめてたいまつのあるかまで一緒に来てもらっことは……？」

『わしでは闇を越えられない。なにせ縛られてしまっているから』

自信満々に言われてしまった。

肩をすくめたアランとビアンカは、気を取り直して来た道を引き返し始める。

目指すは地下の厨房、たいまつが保管されている場所だ。

23 聖なるたいまつ

自然と小走りになりながら廊下を進む。どのような形であれ、目指すべき場所がわかった分、二人の足取りは軽くなっていた。

だが、それもすぐに止まる。

「……うわぁ」

思わず漏れた声。複雑な装飾の扉を抜けた直後であった。

そこは巨大な吹き抜けの空間となっていた。二、三階分がひとつのフロアで繋がっている。アランたちがいるのは、そのうちの二階部分の渡り廊下だった。

感嘆の声、ではない。むしろ恐れ、悲痛さを滲ませた苦悶の声だった。

フロアにいたのは何十人もの人々。すべてが、半透明な身体をした幽霊だった。

おそらくエリックが言っていたこの城の使用人たちだろう。

身なりこそ綺麗な服で着飾っている。だがその表情は皆、苦しげでつらそうだった。空中では何組もの男女が踊っている。

『誰か……止めてくれ……』

『身体が、身体が勝手に。もうイヤ……』

アランたちのすぐそばを通っていた一組の男女。彼らは空中で見事なステップを踏みながら、今にも泣き出しそうな顔で呻いていた。誰も彼もが、彼らと似たような境遇にあった。

フロアの中央には大きな四角い穴が開いていて、その周囲にモンスターがたむろしていた。

「ひゃひゃひゃっ。そら、踊れ踊れっ」

「おおーい、メシはまだか。いい加減腹が減ってきたぜ！」

「この城は最高だ！ 親分ばんざい！」

こちらは実に愉快そうに、聞いているだけで背筋が泡立ちそうな

金切り声を上げていた。

「アラン」

ビアンカがささやく。

「これってもしかして、親分ゴーストたちのしわざなのかな」

「うん……きつとそうだよ。あのひとたち、むりやりこんなことさせられているんだ。ゆっくり眠ることもできずに……」

「ひどい」

口元を押さえ、ビアンカがぼつりと漏らす。アランはその手を握った。急ごう、と率先して走り出す。渡り廊下を駆け抜け、扉をくぐり、階段を下りる。喧噪は遠ざかり、かわりに粘つくような薄暗闇と湿気、そして鼻をつく強烈な臭いがアランたちを襲った。

涙目になりながら我慢して通路を進む。モンスターの気配があった。かちやかちや……と、食器を運ぶ音がする。アランとビアンカはうなずきあつた。

きつとここが厨房だ。

ふたりは棚の陰に隠れるように慎重に進んでいった。調理台と思しき大きな机に身を隠したとき、どん、と大きな音がした。二人の息が詰まる。

すぐそばでモンスターが談笑していた。

「お、それが今日のメインディッシュか？」

「いや。親分がとびつきりのごちそうを用意してくれるんだとさ。

これはそれまでの繋ぎ」

「そりゃ楽しみみだぜ。へっへっへ」

どきん、どきんと心臓を高鳴らせながら、同時に漂ってくる猛烈な臭気に呻き声を必死に抑える。これは巨大な肉が完全に腐った臭いだ、ぜったい。モンスターはこんなものを食べるのかとアランは辟易した。

やがて腐った肉を置いたままモンスターはテーブルを離れていく。様子を窺うと、二つの炎がゆらゆらと揺らめいているのが見えた。巨大なるうそく型のモンスター『おばけキャンドル』だ。

彼らの目がよそへ行っているうちに、アランとビアンカは物陰を飛び出した。身を屈め、厨房の奥を目指す。そこは壁一面が物置棚になっていた。アランたちは極力物音を立てないようにたいまつを探し始めた。ときどき後ろを振り返り、モンスターたちがこちらに気付いていないことを確認する。

壺をのぞいていたビアンカに袖を引かれた。

「アラン、これ」

中から取りだしたのは表面に複雑な文様が刻まれた木の棒だった。先端に青く染められた布が巻き付けられ、さらにそれを保護するように銀細工の装飾が施されていた。

「まちがない。きつとそれだよ」

「ええ。……でも聖なるたいまつをこんなところに置いておくなんて、エリックさんってやつぱり変わっているのね。まちがえて薪に使われたらどうするつもりなのかしら」

呆れた声を出すビアンカ。アランは苦笑し、それからすぐに表情を引き締めた。

来たとき以上に慎重に、アランたちは厨房を横切る。幸い、会話に夢中なモンスターたちに気付かれることなく部屋を後にすることができた。

24・親分ゴースト現る

「じゃあいくよ、アラン」
「うん」

アランがうなずくと、ビアンカは短く呪文を唱えた。指先に小さな火の玉が出現し、たいまつ先端に移る。すぐに燃え広がり、たいまつは煌々と光を放ち始めた。見るだけで心が落ち着くような、深い青の輝きだ。

厨房を抜けたアランたちは、再びあの漆黒の階へと足を踏み入れていた。エリックのアドバイスどおり、たいまつを暗闇に掲げる。

まるで布に水が染み渡るように、内部の様子がはっきりと見えるようになった。濃く濁っていた闇がどこか苦しそうに隅へ隅へと追いやられていく。

「すごい。エリックさんの言ったことはほんとうだったんだ」

「ほんとうね。でも……だったら最初からこれを使ってほしかったわ」

ベランダでのやり取りが尾を引いているのか、ビアンカはどことなく不満そうに頬を膨らませる。二人は寄り添うようにゆっくりと歩き始めた。

遠くモンスターたちの嬌声が聞こえる。

これから彼らを討伐するのだと考えると、自然と身体が固くなった。

だが引き返そうとは思わない。大広間でモンスターに縛られた人々を見たこと、そしてアルカパで待つあの猫のことがアランたちに「ぜったいに退くものか」という勇気を与えていた。

最初にこの階に入ったときにはわからなかった階段を見つけた。

勢い込んで登り始めたアランたちの足は、しかし次第に重くなった。

……何か、違う。空気が他よりも重い。

「ビアンカ、気をつけて」
「うん」

間違いない。この先に強い敵がいる。

階段を上りきると、絨毯敷きの広い廊下に出た。たいまつが壁面に施された精緻な文様を浮かび上がらせる。調度品も他の階より一段階、豪華に見えた。

行く先に大きな大きな扉が見えた。右手と左手、向かい合うようにひとつずつ。

左手の大扉は開いている。そこから、たいまつに照らされてもお淀む闇がゆらゆらと漂い出ていた。

アランとビアンカは武器を構えた。まっすぐにその扉へと向かう。大扉の先は謁見の広間だった。扉の入り口から中央奥の椅子まで赤毛氈あかもんせんが続いている。

アランがたいまつをゆつくりとかかげると 椅子に腰掛けた『そいつ』が見えた。

「ほほう。これはこれは。珍しい客だな」

粘つく声。麻布を擦る音を立てながら『そいつ』が椅子から立ち上がる。全身を包むローブはところどころ穴が開いていて、そこから白い骨が見えた。『そいつ』は笑う。からからから……と骨同士が擦れ合う乾いた音が響いた。

「おまえが」……『親分ゴースト』！

アランとビアンカが唱和する。「そうとも」と『親分ゴースト』は首肯した。余裕たつぷりにこちらへと二歩、三歩歩いてくる。アランの頬に汗が伝った。初めて味わう緊張感だった。

「こんなガキどもが俺たちの根城に乗り込んでくるとはなあ。結構、結構。なかなか旨そうじゃないか。けけけ」

「なんですって」

ビアンカが気色ばむ。すると『親分ゴースト』がにやりと笑った。「ちようど俺も子分たちも退屈していたところだ。せいぜい」
もったいつけたような間。直後、アランは異変に気付き、声を上

げようとした。だが。

「　　愉しませてもらおうかつ！」

『親分ゴースト』が言い放った刹那。

アランとビアンカの足元が突如として『消えた』。

「……………えっ」

「き、きやあああああっ！」

床に開いた大きな穴にアランとビアンカは為す術もなく吸い込まれる。後にはただ、『親分ゴースト』の嘲笑だけが響いていた。

25・背中合わせの攻撃呪文

落ちる。

落ちる。

落ちる！

長い悲鳴の尾を引きながら、アランとピアンカはひたすら落ち続ける。

視界の端を、もの凄い勢いで白い何かが過ぎ去っていった。松明いや、違う。あのホールで目にした、この城の使用人たちだ。彼らの目の前を、アランたちは落下していったのだ。

やがて床に開けられた大きな穴へと入り込み、さらに下へ。衝撃は突然だった。べっしゅあつ、という湿っぽい音とともに落下が止まる。ひどく柔らかく、それでいて水っぽい何かに埋もれる。途端、強烈な臭いがアランたちを襲った。

「けけけ。来たぜ来たぜ、今日のメインディッシュが！」
くらくらする頭でその台詞を聞く。顔を上げると、あの『おぼけキャンドル』たちが頭の炎を愉快げに揺らしながら哄笑を上げていた。

じゃあ、ここは台所……？ でもメインディッシュって……。

「上の連中がお待ちだ。それ、上げる上げる！」

「きやあつ！？」

今度は台座ごと急激に持ち上げられた。隣でピアンカが声を上げる。

アランたちが落下したのは料理が盛られた大皿の上だった。元の材料さえ判別のつかない不定形の何かにアランたちは半身が埋まっている状態である。臭いも感触も最悪だったが、おかげで意識を失うこともなく大きな怪我もない。

だが安堵している暇は彼らにはなかった。

薄暗い厨房から煌々と明かりの灯るホールへ。アランたちは再び可哀想な幽霊たちが踊る場所へと引き上げられた。そして。

「ひゃっほっつ！ メシだメシだ！」

「おいおい、待ちくたびれたぜ！ 早く食わせろお」

「旨そうながキどもだ。こりやあたまらんぜ！」

アランたちを待つていたのは、何体もの『おばけキャンドル』の群れ。完全に囲まれていた。ロウでできた白いナイフを振りかざし、モンスターがじりじりと距離を詰めてくる。臭いで顔を青くしていたビアンカが、短く息を呑んだ。

アランは彼女の手を一度、強く握りしめた。

「だいじょうぶ」

「あ……」

「ぼくらはやらなきゃいけないことがあるんだ。だから、戦うんだ。ビアンカ」

力強いアランの言葉にビアンカは我に返る。「ええ」と彼女はうなずいた。

ふたりは大皿の上にすくと立った。「おおっ!？」とおばけキャンドルたちがざわめく。アランは銅の剣を、ビアンカはいばらのムチを手を取った。

「ぼくたちは負けない。かくごしろ、モンスター！」

「うるさいガキだ。やっちまえ！」

いっせいに襲いかかってきた。アランは一番手前のおばけキャンドルに斬りかかる。

少年の細腕ながらこれまで何度もモンスターを倒してきたアランの力は、おばけキャンドルの身体を真つ二つに切り裂いた。

「ぎゃあああつ」

「はあああつ」

返す刀で次のモンスターを屠る。アランの脳裏には今、はっきりと父パパスの後ろ姿が映っていた。

パパスならどうする？ どう動く？

「お父さんはもつとはやい！ もつと強い！」

「こいつめえっ！」

脇から一体のおばけキャンドルが斬りかかる。アランの反応が若干遅れた。そのとき。

「、マヌーサ！」

さあっ、と周囲を一瞬にして濃い霧が包み込んだ。霧はモンスター一体一体に絡みつき、視界を奪う。さらに

「げげっ！？ ガキが何人もいる！？」

「ど、どうなっているんだ！？」

おばけキャンドルたちは騒ぎ出した。彼らの目には、霧の向こうから何人ものアランたちが立ち向かってくる幻が映る。慌てふためき、闇雲に幻を追っているうちに、彼らは一カ所に固まり始めた。そこから漏れた者や幻の解けた者は、それぞれアランの剣やピアンカのムチによって倒されていく。

おばけキャンドルたちがまるでひとつの団子のように固まったとき

「いくよ、アラン！」

「わかったよ、ピアンカ！」

ふたりは背中を合わせ、同時に攻撃呪文の詠唱に入った。今ふたりが持ち得る、最大の力を持った呪文。

「っ、燃えちゃえ、ギラ！」

「っ、かけぬける、バギ！」

ピアンカの手からは溢れる炎の波が。

アランの手からは鋭い風の刃が。

おばけキャンドルたちに襲いかかる！

「ぎゃああああああああっ！」

長い長い悲鳴。

やがて炎と風が収まったとき、モンスターの姿はすべて消え去っていた。

26・レヌール城決戦の舞台

「おお……」

風が止み、炎が消え去ったホールで、静かなどよめきが走った。

「何ということだ」

「あんな小さな子どもたちが……」

「信じられん。これは夢だろうか」

口々に囁きあうのは、親分ゴーストの呪いによってこのホールに縛り付けられている使用人たちだった。彼らの身体はまだ自由になつていないが、それでも幾分束縛が緩んだのかアランたちを遠巻きに眺めている。

驚き半分、不安半分の彼らに、アランは静かに語りかけた。

「もうだいじょうぶ。後は僕たちがなんとかするから。ぜつたい、

『親分ゴースト』をたおしてみせるから」

「そうよ。そしたらみんな自由になれる！ 私たちにまかせて！」

ビアンカも言葉を重ねる。使用人たちはお互いに顔を見合わせていた。

歓声は上がらない。静かなどよめきが広がるばかりである。アランとビアンカは少しだけ不安そうに互いの顔を見た。

「どうしたんだろ。みんなあんまりうれしくなさそう」

「きっと、親分ゴーストが何かをするんじゃないかって、不安なんだと思うわ。でも」

ビアンカは頭上を見上げる。

「このままじゃいけないよね。エリックさんたちのためにも、ここの人たちのためにも……そして、あの猫ちゃんのためにも」

「うん」

アランはうなずく。武器を構えたまま、二人は再び上の階に向かって歩き出した。

すると

「……え」「……あ」

呆然とつぶやくアランたちの前で、使用人たちがくるくると回り始めた。部屋の端で腰掛けていた者たちも近づいてきて、アランたちの頭上をさまよう。彼らは階上へ向かうホールの出入り口に列を作った。まるでアランたちを見送るように。

彼らの無言の励ましを背中に受け、アランとビアンカは力強く一歩を踏み出す。ぜったいに負けるものかと決意を新たにして

レヌール城の闇はもう、怖くはない。

『親分ゴースト』が居座る最上階まで一気に駆け上がった二人は、巨大な廊下を横切るモンスターの陰をとらえた。

「さて、『親分ゴースト』！」

アランが叫ぶ。『親分ゴースト』はちらりとアランたちを見ると、そのまま扉の向こう側に消えた。アランたちも走る。その扉は、アランたちが階下へと落とされた謁見の間から廊下を挟んでちょうど反対側にあった。

汗ばむ手をふたりでしっかりと握り合ってから、アランとビアンカは勢いよく扉を開けた。

途端に吹き付ける冷たい風。巨大なベランダに出た。

どこまでも広がる夜空の闇と星光を背に、『親分ゴースト』が仁王立ちしていた。ぼろぼろのマントが風にあおられはためく。

「ぎぎぎ……まさかこんなガキどもがここまでやるとは」

「さあ、あとはあなただけよ。覚悟しなさい！」

ビアンカが鞭を振りかざし啖呵を切る。『親分ゴースト』は背中をそらせて笑った。

「かかっ！ 威勢のいいこつたなあ。だが、手下どもを何匹倒したところでこの俺には敵うまい！」

「そんなのやってみなくちゃわからない！」

アランが剣を構えた。

「みんなのために、ここでおまえをたおす！」

「かあつかかっ！ やってみやがれクソガキがあっ！」

ついに『親分ゴースト』がアランたちに牙を向き、襲い掛かってきた。

27・親分ゴースト戦 前編

『親分ゴースト』の手が伸びる。骨だけとなった指先が異常に伸び、鋭く尖った先端がアランを襲う。受け止めた剣から重い衝撃が伝わり、アランは体勢を崩した。

「かーっ！」

尻餅をついたところへ『親分ゴースト』が覆い被さってくる。剣を振り上げようとするアランだが、焦るあまり先端が石床を削るだけだった。

「アランッ！」

脇から伸びるムチ。『親分ゴースト』の手首に巻き付いて動きを止める。

「さあ、今のうちだよ！」

「しゃらくさいわ、小娘が！」

ビアンカに向き直った『親分ゴースト』は空いた手でムチを掴んだ。そのまま強引に振り回す。ビアンカの軽い身体は簡単に宙に浮き、そのままアランに激突した。ふたりして空咳を繰り返す。

むきになって立ち上がるビアンカに、アランは手を向けた。防御力上昇魔法『スカラ』をかける。魔法の防御膜がビアンカの身体を柔らかく包み込んだ。

「むりにつつこんじゃないだめだ。ビアンカはそんなに打たれ強くないんだから」

「っつ、くやしいなっ」

「帰れなくなったら意味がないよ。ふたりで帰るんだから」

そう言い、アランも自身にスカラをかける。そうして一歩踏み込んだとき。

「、ルカニ！」

「えっ？」

どつ、と重くなる身体。反対に着ている服がひどく頼りなく感じられる。

防御力低下呪文『ルカニ』

アラン、という悲鳴と同時に『親分ゴースト』の拳が炸裂した。

『おおきづち』から痛恨の一撃を受けたときとは比べものにならないほどの衝撃。

気がつくと、アランの身体はテラスの端の方まで吹き飛ばされていた。ビアンカが駆け寄り、抱き起こす。目が回って上手く立ち上がることができない。

か、回復を……しなきゃ。

そう思うが脳震盪を起こした身体では呪文の詠唱もままならない。

『親分ゴースト』はゆっくりと近づいてくる。

「かか、かかかかかっ」

耳障りな笑い声が二人のところに届く。

アランは動けない。ビアンカもまたアランを抱えたまま動かない。

『親分ゴースト』の嘲笑が止んだ。とどめを刺す気だ。

そのとき、ビアンカが決然と顔を上げた。まっすぐにその掌を敵に向ける。一瞬『親分ゴースト』がひるみ、身構える。

ビアンカは短く詠唱を終わらせた。

「マヌーサー！」

『おばけキャンドル』たちを惑わせた、幻惑の霧。絶対の勝利に油断していた『親分ゴースト』はその罠に完全にかかった。

「おおっ!? これは……くそう、小娘え！」

暴れる。その隙にビアンカはアランを抱きかかえて移動した。

『親分ゴースト』に位置がばれないよう、小声で語りかける。

「アラン、薬草だよ。今のうちにほら、飲んで。きずぐちにも塗っておくね」

「あ、ありが……と」

ようやく視界が戻ってくる。アランの目の前にあつたビアンカの顔は汗ばみ、これまで見たことがないほど真剣な表情だった。

強いね、と小さなつぶやきが聞こえる。

アランはうなずいた。だが、諦めない。ビアンカの声にも恐れの色はない。

ここで諦めたら何のためにエリックは、使用人の霊たちは、そしてあの哀しそうな女の方は、自分たちに願いを託してくれたのかわからなくなる。

絶対に負けないと決意したのか、わからなくなる。

「、スカラ」

残り少ない精神力をかき集め、アランは再び自らの防御力を引き上げた。これで『親分ゴースト』のルカニの効果がかき消される。

今だ目標を求めて暴れ回る『親分ゴースト』の背に、アランとビアンカは決然と立ち向かった。

だが

「そこかあっ！」

音を聞きつけ、『親分ゴースト』が振った腕。そこから炎が巻き起こった。

まずい、とアランは思った。これは呪文 複数の目標をその火に巻き込む『ギラ』。

目の前に壁のように広がっていく炎。

そのとき、視界の端で金色のお下げが揺れた。

ビアンカがギラの炎の前に敢然と立ち塞がった。

28・親分ゴースト戦 後編

ビアンカが大きく息を吸い込む。まるで自分を鼓舞するかのよう
に、力強く一步を踏み出した。

腕を、振る。

「いっけええっ、ギラッ！」

巻き上がる炎。

ふたつの火の手が正面からぶつかり合った。

空気がきしむような音が響く。

額だけでなく、腕からも汗を浮かべながらビアンカは『親分ゴースト』の呪文を真正面から押し返そうとしていた。

「かーっ！」

相手もその意図に気づいたのだろう。馬鹿にするなど言わんばかりに咆吼を上げる。

マヌーサの霧が、逆巻く炎に煽られて消えていく。ビアンカの表情が徐々に苦しげなものになっていく。

そして

「きゃあああああっ！？」

どんっ、と爆発音が響き、黒煙が上がった。

衝撃でベランダはびりびりと揺れ、小柄なビアンカはそのまま地面に叩き付けられた。だが『親分ゴースト』も無事ではない。爆風に視界を奪われたのか、骨だけの目元を押さえて苦悶の声を上げている。

「く、そっ。くそおおっ。小娘！ よくも！」

鋭い爪を伸ばしてビアンカににじりよる。その体全体から醜く濁った煙が滲み出ている。それは夜の闇の中でもなお暗く、視界を奪うほどだ。

ふと、『親分ゴースト』の歩みが止まる。

何かに気づいて、左右を見る。

「……へへっ」

膝を突きながら、ビアンカが不敵に笑った。

どこからか空気を切るような音が 近付いてくる。

「ざんねんでした。わたしは、ひとりじゃないんだから」

その言葉の意味を理解できず、完全に立ち止まる『親分ゴースト』

空気を切る音はどんどん近付いてきて。

どこから そう、上から。

がばっ、と顔を上げた『親分ゴースト』のすぐ目の前に、アランが振り下ろした剣の切っ先があった。

「これで」

驚愕する敵にアランは叫ぶ。

「おわりだあっ！」

「う……うおおおおおっ!?!」

全体重と落下の勢い、そして渾身の力を込めた一撃が『親分ゴースト』を脳天から貫いた。硬い骨を砕く感触にもかまわず、アランは自らの剣に力と思いの全てを込める。

やがてその切っ先は骨よりもなお硬いものにぶちあたった。キンッ、と甲高い音を立て、同時に落下が止まる。

上から、下まで 『親分ゴースト』の体を切り裂いたのだ。

ぶわあっ。『親分ゴースト』から濁った煙が吹き飛ぶ。

衝撃によるめきながら、アランは急いで離れる。ビアンカとふたり寄り添うように、固唾を吞んで『親分ゴースト』の様子を窺う。

しばらく敵は止まったままだった。

「ぎ……」

「!?!」

アランの顔にさっと緊張の色が走る。ぎこちないながらも、『親分ゴースト』がこちらを振り向いたのだ。

今にも崩れ落ちそうな様子で、心なしか体の下半分も透けている

ように見える。だが、『親分ゴースト』はまだそこにいた。いちはやく、ビアンカが武器を構え直した。「なんどでも……！」とつぶやく彼女の瞳には強い意志が宿っている。

対するアランは『親分ゴースト』の様子を見て取ると、武器を構えることなく数歩、近付いた。目前で、改めて剣を構える。

そのときだ。

「……ま、まいった……」

どこか情けない声で『親分ゴースト』はつぶやいた。満足に動けないのだろう。不自然な体勢のまま懇願してくる。

「これ以上やられたら、本当に消えちまう……。もうこの城にはちよっかい出さねえ、子分たちもみんな出て行かせる……。だ、だから許してくれ。この通りだ」

「アラン！ ダメよ、そんなやつがいいなりになっちゃ！」

ビアンカが憤慨した声を上げる。

アランはじつと『親分ゴースト』を見る。アランを見返すモンスターは、心なしかさきほどよりも小さく見えた。

長いこと見つめ続け、そして『親分ゴースト』がかたときも目はなさいことを見て取ったアランは、ゆっくりと剣を下ろした。

「いいよ。逃がしてあげる」

「あ、アラン!？」

「でも、もしかたみんなに迷惑をかけたら、そのときはゆるさないからね。ぜったい」

驚きの声を上げるビアンカを背に、アランはゆっくりと諭すように『親分ゴースト』へ告げた。するとモンスターは脱力したように長い息を吐いた。

それから どういうわけか少し親しげに アランに言った。

「へへっ……ありがとよ。あんた、いい大人になるぜ……」

その言葉とともに、『親分ゴースト』の姿がすうっと薄れていった。アランはその様子を見届けた。

同時に城全体から禍々しい気配も消えていく。

いつの間にか、夜明けが近付いていた。

29 溢れる笑顔と金色の宝石

ふと、夜明けの光とは別の輝きがアランたちに近づいてきた。

「……………エリックさん？」

驚きの声を上げるアランに向かって、エリックは手を差し伸べた。彼の隣には、あの大きな部屋で見た女性の幽霊が浮かんでいる。彼女はエリック同様、ピアノカに向けて手を伸ばす。

アランたちは彼らの手を握る。朝霧を掴んだような感触とともに、二人の体はふわりと浮かび上がった。そのまま空中を走り、屋上へと運ばれる。

そこは、以前ピアノカが閉じ込められていた墓の前であった。

エリックが穏やかに微笑みかける。

「ありがとう。君たちのおかげでモンスターたちは去った。これでこの城も平穏を取り戻すだろう」

「そんな……………」

アランははにかんだ。一方のピアノカは「あれだけ苦労したのだから、みんなで喜んでくれてもいいのに」となぜか不満気だ。その様子を見て、エリックの隣にいた女性がくすりと笑った。初めて見る笑顔だった。

「……………ようやく、この城に朝が戻ってきます。小さな勇者さんたち、本当にありがとう。この城にいる人たちを代表して、私たちがお礼を言います」

「もう、だいじょうぶなんですか？」

「ええ。あのときはごめんなさい。ろくにお話もできなくて……………。モンスターの束縛が強すぎて、姿を現すのが精一杯だったのです。でも、これでやっと自由になれる……………」

「そうだったんだ……………。あれ？ でもエリックさんって、ずいぶん自由に動き回っていたような」

ビアンカが首を傾げると、女性は笑った。今度は困ったような笑顔だった。

『このひとは、昔から奔放なところがあって……モンスターたちもこのひとの強引さにはいささか手を焼いていたみたい』

『こら。何を言うか。それでは私がモンスターより厄介な存在に聞こえるではないか』

ぶすつと不満を垂れるエリック。アランとビアンカは顔を見合わせた後、声に出して笑った。

取り戻せたのだ　そう、心から思えた。

朝日が空に差し込む。レヌール城の屋上から見えるそれは、思わず言葉を失うほど綺麗だった。

『さて……そろそろ行くか。おまえ』

『はい。あなた』

「え、もう行っちゃうの？」

ビアンカが問う。エリックたちは首を縦に振った。

『私たちは、もう死んで魂だけの存在になっている。モンスターたちに縛られたせいで長くこの地に留まらざるを得なかったが、本来は神のもとへと召されなければならない』

『ここでお別れね』

女性が再び手を差し伸べてくる。アランとビアンカは、その手をしっかりと握りしめた。手応えはないのに、なぜか手の平がじんわりと温かくなる気がした。

やがてエリックと女性は、陽光が夜の闇を拭う様に合わせるように、ゆっくりと空へと昇っていった。音もなく輪郭が消えるまで、アランたちはじっとその行き先を眺めていた。

「……行っちゃったね」

「うん」

「いろいろあって、いたい思いもしちゃったけど……来て、よかったね」

「うん」

「ビアンカがうーん……と背伸びをした。

「さて、と。早く戻らなきゃ。あんまり遅くなっちゃうとお母さんに怒られちゃうわ。あのネコちゃんのことでも心配だし。……あら？」
ふと、ビアンカが墓標の根元を見た。アランも視線の先を追う。
そこには、朝日の反射で輝く宝石があった。金色のそれは、見つめるだけで吸い込まれてしまいそうな不思議な力を感じた。

「ビアンカが宝石を手取る。

「綺麗な石……きつとエリックさんたちのお礼だわ。もらっていきましよ、アラン」

「はい、と手にした宝石をアランに渡す。アランは首を傾げた。

「宝石だよな？ それはビアンカがもっていたほうがよくないかな」
「いいの。これはエリックさんのお礼だけど、私のお礼でもあるもん」

「ビアンカの？ どうして？」

「もう、あんがいにくいね、アランは。そんなことじゃ、大きくなってもおよめさんが来ないわよ？」

「呆れたように言うビアンカを前にしても、アランには何のことかわからない。そうこうしている内に、ビアンカは半ば無理矢理アランの手に宝石を握らせてしまった。

「とにかく！ これはアランが持ってて。私たちが今夜、すごい冒険をしたんだって証に。私たちが力を合わせれば、こんなすごいことができるんだぞっていうこと、アランにはずっと覚えていてほしいから」

「……うん。わかった」

「よろしい」

「にぱっ、とビアンカは笑った。アランもつられて笑った。

「それから二人は歩き出す。

「じゃあ、かえろう」

「ええ。かえりましょう。アルカパに！」

30・ピアンカとの別れ

翌日

小さな子どもたちがレヌール城のモンスターを退治した、という噂は瞬く間に町中に広がり、アランとピアンカはちょっとした有名人間になった。もちろん、黙って深夜に抜け出したことについてはピアンカの母親や、何とか風邪から回復したパパスからこっぴどく叱られた。それでも、アランとピアンカはまったく後悔していなかった。

そして

「さあ、約束だわよ。あの猫ちゃんを自由にしてあげて」
町の広場で、例の二人組を前にしながらピアンカは胸を張った。
堂々とした彼女の態度に、男の子たちは顔を見合わせる。

「まさか本当にたいじしてくるなんて」
「そうだよなあ。……うん、わかった。この猫はあんたたちにあげるよ。約束だもんね」

そう言っつて男の子のひとりが杭につないでいた紐を解き放つ。子猫は男の子に噛みつくでもなく、とことこと大人しくアランたちのところへやってきた。

ピアンカが子猫の頭を撫でる。

「よかったね。もういじめられなくてすむよ」

「なあー」

「あはは。返事したよ、この子。かわいいなあ」

「うん」

アランは生返事をしながら、じっと子猫を見つめていた。目が合うと、優しく微笑みかける。もうだいじょうぶ、そんな思いを込め

た。

子猫がアランのもとにやってくる。アランもまた、子猫の頭をゆつくりと撫でた。今度は鳴き声も上げず、子猫は大人しくされるがままになっていた。手を止め、アランが踵を返して歩き出すと、子猫は当然のようにその後ろについてくる。

「あ！」

突然、ビアンカが声を上げた。

「そうだわ、アラン。この子に名前をつけてあげなくちゃ」

「名前、かあ」

「そうね……ゲレゲレっていうのはどう？」

アランは子猫を見る。きよとんと首を傾げられた。

「あんまり気に入ってないみたい」

「そう？ じゃあ、ねえ。アンドレは？ これならかつこいいでしょ」

「よ」

「でも、この子は」

「なあに、これでもダメ？ うーん、それじゃあかわいいやつで

……チロル！」

「チロル」

アランは子猫を見る。大人しく座ってこちらを見ていた子猫は「なあご」と鳴いた。アランはビアンカに向き直る。

「うん。いいんじゃないかな」

「よし、決定！ ネコちゃん、これからあなたの名前はチロルよ。

よろしくね！」

「じろじろ……」

チロルがビアンカの手をなめる。「あはは、くすぐったいってば」と笑うビアンカをアランは微笑まじげに見つめていた。

空を見る。太陽は頭上高く上がっていた。そろそろパパスと約束していた時間だ。

「行こう、ビアンカ。チロル。そろそろ戻らなきゃ。お父さんがまってる」

「あ、そうね」

笑顔で応じたビアンカは、しかしすぐにしゅんとうつむいた。

「でも、もうお別れなんだね。少し、寂しいな」

「だいじょうぶ。となりまちなんだから、すぐに会えるよ」

「うん。そうだね」

「もしよかったら、チロルはビアンカがあずかって」

と、そこまでアランが口にしたとき、チロルがビアンカの脇をすりりと抜け出した。アランの足元で座り込み、なあご、と鳴く。まるで抗議しているようだった。

ビアンカが腰に手を当て苦笑いする。

「ダメよ。チロルちゃんはアランと一緒に居たいって言ってるんだから」

「そっか。ごめんね、チロル」

「なあご……ぐるぐる」

「ふふ。でも私もチロルちゃんには忘れてほしくないから……これをあげるね」

ビアンカは自らのお下げを結っていた二本のリボンを外すと、一本をチロルの首に優しく結びつけた。

もう一本をアランへと手渡す。

「これ、私のお気に入りなの。大切に持っていて。チロルちゃんとアラン、それから私。みんなずっと、ともだちなんだって証だよ」

「うん。わかった。大切にするよ、ビアンカ」

アランはビアンカのリボンを両手で握りしめた。なくさないように、懐にしまう。

「さ、行きましょう。お母さんたちにこれ以上怒られちゃったたらまらないもの」

率先して歩き出すビアンカ。すれ違いざま、涙の欠片が宙を舞ったことをアランは見逃さなかった。

その後、ダンカンや町の人たちとの挨拶をすませたパス、アラン、チロルは、その日のうちにアルカパを後にした。宿が見えなく

なるまでずっとビアンカは手を振り続け、アランもそれに応えていた。

このときのアランは知る由もなかった。

気の強い、しかし誰よりも優しいこの幼なじみと再会するまでに、長い長い時間が必要になることなど

31 パパスが見た素質

「しかし、今回のことは父も驚いたぞ」

パパスからそんな言葉が漏れたのは、サンタローズへの帰路をし
ばらく歩いた頃だった。

「まさか私が床に伏せている間に、たつたふたりでモンスターたち
を退治してしまうとは。しかも、話ではそのボスはかなりの強敵
だったという」

「でもお父さん、『親分ゴースト』は僕ひとりじゃ勝てなかったよ。
ビアンカや、城のひとたちのおうえんがあつたから、勝てたんだ」

アランはまっすぐにパパスの目を見ながら言う。それは紛れもな
い本心で、同時に隠すべきことではないとアランは直感的に理解し
ていた。

パパスは一瞬、驚いたように目を丸くした。ふっ、と優しく微笑
む。

「そうか」

「うん」

パパスのすぐ後ろを小走りについてくるアラン。その姿は、アル
カパに到着したときよりも少しだけ大きくなっていた。

「……ところでアラン。その子猫のことだが」

と、パパスが言いかけたそのとき。

草むらをかき分けて、突如として巨大なイタチのモンスターが現
れた。三匹。威嚇するように荒い鼻息を吐いていた。今にも襲いか
かってきそうな気配だ。

唸るような金属音を立て、パパスは長剣を抜き放った。前へ一歩
踏み出し、背中の子へ声を掛ける。

「アラン、下がっている」

「ううん、お父さん。僕も戦う」

言うなり、アランは銅の剣を構えた。自分から打って出る真似はしない。父の目の届くところで迎え撃つ姿勢を取る。「ふむ」とパスは感心したように漏らした。

モンスターが一斉に襲いかかってくる。

数は多くとも、パスの敵ではない。あつという間に一匹、斬り伏せてしまう。仲間の亡骸を踏み越えアランへと突進してきた一匹も、アラン自身の剣で退けられた。

モンスターは懲りずに波状攻撃をしかけてきた。先の二匹をさらに踏み越え、最後の一体がアランへと牙を剥く。

少しだけ反応が遅れた。躲せない。迎撃もできない。アランは咄嗟に防御の姿勢を取った。

そのとき。

「ぐるるるうっ！」

「キーン！」

唸り声と悲鳴が重なった。

何と、それまでアランの足元に寄り添っていたチロルが自ら前に出て、モンスターに攻撃を加えたのだ。予想外の反撃に油断したのか、首筋に爪の傷を受けたモンスターはあえなく後退する。

その隙を見逃すパスではない。一息で間合いを詰めると、悲鳴を上げる暇も与えず一刀両断にしてしまった。

「ふう……大丈夫か、アラン」

「うん。僕はへいき。でもチロル、すごいじゃないか」

再び足元に寄ってきたチロルを抱き上げ、アランは驚きの声を上げる。チロルは目を細めながら「なおん」と鳴いた。まるで胸を張って自慢するように。

思案げに顎に手を当てていたパスは、アランにたずねる。

「気になっていたのだが、その猫はアルカパの子どもが拾ってきたのだったな」

「そうだよ。でもいじめられていたから、何とかしなきゃって思ったんだ」

「だがアラン、その子猫はもしかしたら
言いかけ、パパスは口をつぐんだ。」

「なに？ お父さん。チロルがどうかしたの？」

「いや。子猫にしては勇気と力があるなど感心していたのだ。ただ、まあ……チロルという名前がいかに何と言うか……ずいぶんと可愛らしい名前をつけたものだ、思ってたな」

「え？ でもお父さん、チロルは女の子だよ」

「……………なぬ？」

ねーチロル、とアランが語りかける横で、パパスは啞然としていた。彼はまじまじとチロルを見るが、可愛らしい子猫という以外、雄なのか雌なのかさっぱり区別がつかなかった。

「アランよ。お前はいつのまに子猫の性別を見分けられるようになったのだ」

「うーん……？ なんとなく、かなあ。ほら、目のくりつとしたところとか、ふんいきとか。女の子なのは間違いないよ、お父さん」

「なんと……まあ……」

しばし呆然としていたパパスだったが、ふいに遠い目をした。

「これもまた妻から受け継がれし素質、なのかも知れぬ」

「お父さん？」

何でもない、とパパスは言った。

「さあ、先を急ぐぞ。不測の事態で皆には心配をかけているからな。早く戻らねば」

「そうだね。サンチヨにチロルのこともしょうかいしなきゃ」

アランは笑いながら言った。そうだそうだと言わんばかりに、胸に抱かれたチロルも「なあるう」と鳴いた。

32 不思議な落とし物

サンタローズに到着するや、入り口の番をしていた男が駆け寄ってきた。

「おお、パパスさん！ お帰りなさい。なかなか戻られないので心配しましたよ。風邪を引かれたとか。大変でしたね」

「いや、すまない。体だけは頑丈だと思っていたのだが、私も歳なのかな」

「何をおっしゃいますか。疲れが溜まっていたのですよ。ゆっくり休めという神様の思し召しでしょう」

「本当に情けない。皆には心配をかけた」

そう言つてパパスは頭を下げる。いやいや、と男は手を振った。

「坊主もおかえり」という言葉に「うん」とアランは答えた。

「そういえば、先程から気になっていたのだが……その手の物は？」

パパスが首を傾げる。男の手には侵入者撃退用の槍の他に、なぜか小さな鍋が握られていた。男は鍋をかかげ、苦笑する。

「ああ、これですか？ ついさつき、そこで拾ったものでして。どうやらすぐその老夫婦のものらしく、これから届けようと思つていたのでですよ」

「はて。持ち歩く小物ならまだしも、鍋が落ちていたと？」

「最近多いんですよ。ちょうどパパスさんたちがサンタローズを出られた頃からかな？ あちこちの家で鍋やらやかんやら食器やら、おおよそ落とし物にはなりそうにないものが次々となくなつていまして。そのどれもが、いつの間にか外に転がっているのですよ。そうですね、ちょうど」

男は宿屋の方向を指さした。

「宿屋のグレイスさんの周辺にぼろぼろと。最初は子どももの遊びだと思つていたのですが、村の子どもたちは皆本当に知らないようで

もちろん、グレイスさんには何の心当たりもないそうです。むしろ、彼自身が一番被害に遭われていることがわかっています」

「ふうむ……」

「まあ、村の誰かに危害が加わったり、本当に生活に困ったりする事態にはなっていないので、皆困惑しているところですよ」

「わかった。少し調べてみよう。大事ないとは思いますが、万が一ということもあり得る。それから念のため、洞窟の見張りを強化するよう頼んでみてくれ。もしかしたら、いたずらなモンスターが洞窟から出てきているのかもしれないからね」

「わかりました。お願いします」

うむ、とうなずくパパス。彼等の会話の間、アランは後ろで大人しくしていた。チロルの毛並みをゆっくりと撫でながらつぶやく。

「ふしぎなことが起きているんだね。でも、いくら危なくなっても、みんな困ってるよね」

「なああ〜？」

チロルが首を傾げる。アランは微笑んで、それから表情を引き締めた。

もし誰かのいたずらなら、大人よりも僕の方が見つけやすいかもしれない。お父さんひとりで探すより、いたずらした人がはやく見付かるかも。そうしたら、そんなことしちゃダメだよって教えてあげないと。

ぐっ、と拳を握る。その使命感は、ひとえにレヌール城攻略で身につけた自信があればこそだった。

自宅の前では例によってサンチヨが待っていた。またもや泣き顔である。パパスは彼を宥め、事情を話すとそのまま村の教会へ歩いて行った。村に帰った報告とあわせ、情報収集をするらしい。

「ねえサンチヨ。僕もお父さんの手伝いをしに行っていない？」

アランが言うと、サンチヨは少し驚いたように目を丸くした。

「大丈夫ですよ、坊ちゃん。ここは旦那様に任せておきましょう」

「でも、村の人は困っているんでしょ？ 僕だって何かしたい」

「坊ちゃん……」

ふう、とサンチヨがため息をつく。呆れた、というよりも肩の力を抜いた、温かな表情を浮かべる。

「そこまでおっしゃるのなら、このサンチヨのお願いを聞いてはくれませんか？」

「サンチヨのお願い？ サンチヨも困ってるの？」

「ええ。旦那様や坊ちゃんがお帰りになられると聞いて、温かい食事でも思って支度をしていたのですが、つい先程まで使っていた『さじ』がなくなっているのです。たくさんシチューを作っていたのですが」

「え？ シチュー？」

アランの食いつきにサンチヨは笑った。

「予備はありますが、あのさじは長い間使っていた愛着あるもの。できれば探して欲しいのです」

「わかった。さじ、だね？」

「はい。見付かり次第、ご飯にしましょう。ですからあまり遅くならないように」

「うん。すぐにもどるよ。いこ、チロル！」

「なおん！」

くんくん、と匂いを嗅いでいたチロルに声をかけ、アランは勢い良く走り出した。

33・妖精族のペラ

抜けるような青空。空気は澄み切っていて、どこまでも高く昇っていく。けれどその分、地上に吹き下ろす風はとても冷たかった。遊び盛りのアランであっても、ずっと外にいては体の芯から冷え切ってしまう。サンチヨの捜し物を求めて村の中を歩き回ったアランだが、なかなか芳しい成果が得られず、チロルを胸に抱いて途方に暮れていた。

「はあ……」

自然、ため息が出る。そんなアランをチロルは心配そうに見つめていた。

ふと、顔を上げる。アランが休憩していたのは村の入り口にある宿屋の前だった。寒さが応えていたせいもあって、アランの足は自然と建物の中に向かった。

「いらっしやい。……おや、坊やじゃないか。どうしたんだい」

宿屋の主人が笑顔を向けてくる。だが、その顔には疲れが見えていた。アランは申し訳ない気持ちになりながら言う。

「うん。サンチヨが使っていた『さじ』がなくなっちゃって、僕、探していたんだ。でもずっと外に出てたら寒くなっちゃって」

「そりゃいけない。待ってな、すぐに温かい飲み物用意してやるから」

主人がカウンターの奥に消える。チロルを床に放したアランは、どことなくほっとした気持ちで椅子に座った。

「そうだよな。あんなに優しいおじさんが、みんなのものをぬすんだり隠したりしないよね」

でも、だったら一体誰が、こんなことを

足元でじゃれてくるチロルの背を撫でながら待つことしばし、宿屋の主人は頭をかきながら戻ってきた。その手には湯気の立つカツ

ブが握られている。

「すまないな、坊や。本当はその猫にも飲み物を持ってこようと思っただが、今度は平皿がなくなってたんだ」

「ううん。いいの。ありがとう、おじさん。……ほら、チロル。半分こしよう」

温かなミルクを一口二口飲んでから、カップを差し出してチロルに分け与えた。その間、宿屋の主人は「おっかしいな……」としきりに咳きながら辺りを探していた。

「坊や。私は少し地下に降りてくるから、そこでゆっくりしてなさい」

「僕も行く」

アランが言うと主人は怪訝そうな顔をしたが、特に止めることはなかった。

主人の後をついてアランとチロルは店の地下に降りる。途端、お酒の匂いが漂ってきてアランは少し眉をしかめた。チロルが「ぷしゅん」とくしゃみをする。

「ここは夜、酒場として開いているんだ。酒の匂いがきつければ、上がっていいんだぞ」

主人の言葉にアランは首を振る。そして彼に続いて辺りを探そうとしたとき

視界の隅に、人影を見た。

大人にしてはやや小柄で、カウンターの上でこちらに背を向けてしゃがみ込み、何やらごそごそとしている。あからさまに怪しいその姿に、アランは軽く身構えた。チロルも小さなひげをぴんと立て、人影の方向を向いていた。

「ねえ、おじさん。あそこに誰がいるよ」

「なに？」

振り返る宿屋の主人。彼はカウンターに視線をやってから、ふいと目を逸らした。

「何もないじゃないか、坊や。こんなときにからかつてはいけない

よ

「え！？ でも、たしかにあそこに」

「あー、ダメだ。やっぱり見付からない。坊や、ここにはやっぱりないよ。冷えるから、早く上に上がるんだ」

そう言つて、宿屋の主人はさつさと一階に戻つてしまつていた。

アランは呆然とその様子を見送り、そしてもう一度、今度は目を凝らしてカウンターを見つめた。人影は相変わらずこちらに背を向けている。間違いなく、そこにいる。だけどよくよく見れば、その体の向こう側は少しだけ透けていた。

まさか、モンスター……？

一瞬、アランは考える。だがその人影からは『親分ゴースト』のような邪悪な気配は伝わってこなかった。チロルを見る。モンスターには敏感なこの相棒も、カウンターの人影をじつと見つめるだけで、警戒している様子には見えなかった。

アランは意を決し、ゆっくりと人影に近づく。

人影は、カウンターの奥にあるいくつもの酒瓶を前に何かを考え込んでいるようだった。

「ねえ」

「きゃっ！？」

ぴょん、と飛び上がる人影。勢い良く振り向いたその顔に、アランは「あ……」と声を漏らした。

お、女の子……？

「……」

「……」

お互い、無言のまま見つめ合う。今日の空のように深い青をした髪が印象的な少女だった。年齢はアランやビアンカよりももう一回り上に見えた。

少女は辺りをきよろきよろと見回すと、自分自身を指さす。

『もしかしてあなた……私のことが見えてる？』

「う、うん」

うなずくアラン。しばらく呆然と固まっていた少女は、やおら両手を握りしめて喜びを爆発させた。

『ああ、よかった！ ようやく私の姿が見える人間に出会えたわ！』
「え、ええつと？」

「なあ」

頭に疑問符を浮かべるアランの足元で、チロルが暢気に毛繕いを始める。この少女は敵ではないと認識したらしかった。満面の笑みで身を乗り出す少女が何か伝えようとしたとき。

「おーい、坊や。いつまで下にいるんだい？ ここは寒い。本当に風邪を引いてしまうよ」

宿屋の主人が心配して降りてきた。アランの前まで来ると腰に手を当て注意する。彼の視線はアランにだけ注がれていた。アランがちらと視線を少女に移しても、「こら、大人が注意しているのによそ見しちやダメだぞ」とさらにお叱りの言葉が飛んだ。

アランは素直に頭を下げた。

「ごめんなさい。その……こつこつとこつこつとめずらしくて、いろいろな見ちゃって」

「そうかそうか。気持ちは分かるよ。私も最初は物珍しさから始めたようなものだから」

ころつと笑顔になる主人。アランは再び頭を下げ、「すぐにもどるから、心配しないで」とお願いして主人には一階に戻ってもらうた。

少女に向き直ると、彼女は難しい表情を浮かべていた。

『やっぱり他の人間には私の姿が見えないみたいね』

「そうみたい」

『うーん。ここじゃ落ち着いて話もできないし……そうだね』

ぼん、と手を叩く。

『確かこの村に、同じような地下室がある家があるわよね？ そこで改めて落ち合いましょ』

「地下室……もしかして僕の家かな」

『そうなの？ それならば好都合だわ！ じゃ、私は先に行って待つてるからね』

「あ、ちよっと！」

すうっ、と姿を消しかけた少女をアランは慌てて呼び止める。

「あの、君はいつたい……？」

『ああ、ごめんなさい。自己紹介が遅れたわね』

少女はアランに向き直ると、にっこりと花のように笑った。

『私はベラ。妖精族のベラよ。よろしくね』

34・ペラのお願い

家に戻ると、サンチヨが笑顔で迎えてくれた。

「お帰りなさい、坊ちゃん。外は寒かったでしょう」

「へいき。それよりサンチヨ。その」

「さじのことなら大丈夫ですよ。私は坊ちゃんのお心遣いを受けただけで、十分満足ですから。さ、これはお礼です。温かいミルクをどうぞ」

ゆったりと湯気の立つコップを受け取り、アランはちびちびとそれを飲んだ。ミルクはぬるめで飲みやすく、体の芯から温かくなっていた。アランはコップをテーブルに置き、床で嬉しそうにミルクを舐めているチロルを見つめながら言った。

「サンチヨ。お願いがあるんだけど」

「なんででしょう?」

「地下室におりたいんだけど……」

「はて。地下室、ですか?」

サンチヨは首を傾げた。やや怪訝そうに言う。

「それは構いませんが、必要なものがあるのなら私に仰ってくださいねば取りに行きますよ?」

「ううん。ちがうんだ。僕、地下室におりてみたいんだ。ええと…

…」

視線を彷徨わせた拳句、アランは苦しい言い訳を試みる。

「もしかしたら、地下室にあるかもしれないから。さじ」

「はあ」

生返事をするサンチヨ。もつと何か上手い理由はないだろうかとアランは頭を巡らせる。その様子を察したのか、長年パスに仕えてきた彼はふつとため息をついた。

「わかりました。地下室の扉を開けて参りますので、少し待っていて

「てください」

「いいの？」

「特に危険はないでしょうし、坊ちゃんがそこまで仰るのなら。ただ、下はとても冷えますので、できるだけ早く上がってきてくださいね」

「ありがとう、サンチョ！」

サンチョの微笑みにアランは笑顔を返した。しばらくして重い扉が開いた地下室に、アランはチロルと共に降りていく。

慎ましやかな一軒家の地下室である。その広さは一部屋分で、壁際には壺が荷物が積み上がっていた。サンチョの言う通り、室内はかなり寒い。

松明を壁に立てかける。チロルが部屋の中央に向かって「なあ」と鳴いた。

地下室の中央にベラが立っていた。

「ありがとう。来てくれたのね。えっと、アラン……でよかったかしら」

「うん。でも、どうやってここまで？ 扉はしまっていたと思うけど」

「私の体は、人間界ではあってないようなものだから」

ベラの言葉にアランは首を傾げる。「子どもには少し難しかったかしら」とベラは笑ったが、すぐに真顔に戻った。

「っと。こんな話をしている場合じゃないわね。実はねアラン、あなたにお願いがあるの」

「お願い？」

「そう。私と一緒に来てほしいの！」

拳を握りしめるベラにアランは困惑した。いきなり来て欲しいと言われても、どこに、何をしに行くのかさっぱりわからない。けれど、ベラの真剣な様子だけは感じ取ることができた。

「最初に会った時、私は妖精族だって言ったわよね？ いま、私たちの故郷の村が大変なの。そのせいで、人間界にも影響が出ている。」

でも私たちだけじゃどうにもならなくて。人間界の人に協力をお願いしようと思つて私が来たんだけど、ここじゃ、妖精族の姿を見ることが出来る人間つて限られているらしくて……。途方に暮れていたときに、偶然、あなたに出会うことができたの」

「でも、どうして僕に」

『私たちの姿が見えるのは、特別な力を持っている証だつて聞いた事がある。あなたが私を見つけてくれて本当に嬉しかった。あなたなら、私たちの村を救えるかも知れない』

ベラの言葉にアランは黙つて耳を傾けていた。そんなアランに、チロルがすりすりと顔をこすりつける。

「…………困っているひとが、いるんだね？」

『ええ。私たちだけじゃなくて、人間界の人々も困っているはず。いま外、すごく寒いでしょ？ 本当なら私たちが春を呼ぶはずなんだけど、それができなくなつてる』

「春を…………」

『だからお願い！ 私と一緒に来て！ そして、私たちの長に会つて！ ポワン様も、きつとあなたを待つてるはずだわ』

言い終えて、ベラはじつとアランを見た。アランはしばらく考えた後、足元のチロルを胸に抱いた。「なあ」と短くチロルが言う。

「…………わかつた。いくよ、僕たち」

『ああ！ ありがとうっ』

「そのかわり、みんなから持つていったものはきちんと返してあげてね」

あれ、ベラがやつたんでしょ、とアランが言うと、ベラは気まずそうに頬をかいた。

『ごめんなさい。私に気付いてもらうにはああするしか思いつかなくて……。でも、その必要もなくなつたから、もう大丈夫。約束するわ。きちんと返すつて』

「よかつた」

アランが笑うと、ベラも優しげな表情を浮かべた。

『アラン、あなたは優しいのね。本当に良かったわ。お願いできたのがあなたで』

その花のような笑顔を見て、何だか気恥ずかしくなる。

ふと、ベラが指先を天井に向かってかざした。途端、松明の明かりしかなかった地下室に眩い光が満ちる。天井の輪郭がぼやけ、遙かかなたまで続く光の階段が現れた。

ベラがアランの手を引く。

『さあ、行きましょう。この先が私たちの故郷

妖精の村よ』

35・春風のフルート

光が、広がる。

足元を優しく包む不思議な階段を上りきった先で、ふと、体の重さが消えた。

さあっ……と冷たい風がアランの頬を駆け抜ける。

次の瞬間、足の裏が固い地面を踏みしめた。

「もう、目を開けていいわよ」

階段を上る間、ずっと手を引いてくれていたベラが言った。まぶしさに目を細めながらアランはゆっくりと瞼を開ける。

「……うわぁ……」

詠嘆した。

雲一つない快晴の下に見えたのは、薄く雪化粧をした巨大な木だった。幹が半分ほどで切り取られ、それまでに繁茂した枝葉がまるで上品なドレスのように木全体を覆い彩っている。ところどころに窓らしき四角いくりぬきが見え、そこから人影が見えた。

思わず、アランはベラにたずねる。

「あれ、もしかしてお家なの!？」

「ええ。そうよ。この妖精の村の長、ポワン様がいらっしやる建物」

「すごい！ おっきい！ きれいだ!」

興奮したアランの声にベラは「ふふっ」と笑った。

「こういうところはアランは子どもなんだね」

「でも本当にすごいんだもの」

「ありがとう。ポワン様も喜ぶわ。さ、行きましょう。私たちが到着するのを待っているはずよ」

手を引かれ、歩き出す。その後ろをとことことチロルも付いている。物珍しさは同じなのか、チロルもまた「なごなご」と鳴きながら辺りを見回していた。

地面から雄々しく張り出した根っこ、その表面に作られた階段を上る。途中振り返ると、妖精の村の全容を見ることができた。雪の積もった平野に切り株の形をした家が建っている。ベラと同じ、耳の長い妖精族が優雅に歩いていた。

妖精、というぐらいだから、羽が生えて空を飛ぶのかなとアランは思っていたが、こうして見る限りは人間とそう変わらないようだ。誰もがみな優しくそうで、あとは何故か女の人が多くて

そこでアランは首を傾げた。どことなく、表情が沈んでいるように思えたからだ。穏やかな村の空気も、よく感じれば体の芯に響きそうな冷たさははらんでいる。アランは思わず二の腕をさすった。

階段を上りきると、正面に大きな扉があった。こんな扉が開くのかと思っていたら、ベラがその細い腕で少し押すだけで扉は滑らかに奥へと動いた。

幹の中は、これもまたため息が出るほどの美しさだった。氷のように滑らかで透明度のある壁がぐるりと幹の内側を覆い、いくつもの本棚が部屋の中に鎮座していた。広い。ビアンカの家の特徴より広いかもしれないとアランは思った。

円状の壁面に沿い、氷か水晶か、透明な結晶が螺旋階段となつて伸びていた。チロルを胸に抱き、アランはしきりに辺りを見回しながらベラの後に続く。途中、何人か妖精族の女性とすれ違い、その度に柔らかな会釈をされてアランは恐縮した。

二階、三階と上がっていき、最上階に昇るとそこは吹き抜けとなっていた。大空と逞しく生い茂る緑に抱かれているような錯覚をアランは抱いた。

ベラがすつと腰を折る。

「ポワン様。人間界の協力者をお連れしました」
「まあ。可愛らしいこと」

アランはそつとベラの背中から部屋の奥を見た。何人かの妖精族に守られるようにして、木でできた大きな椅子にひとりの女性がしとやかに座っている。ゆったりとしたローブに全身をつつみ、大き

な髪飾りと豊かな髪、そして何より、すべてを包み込んでしまうような柔らかな笑みが印象的だった。

あの方がポワン様よ、とベラが小声で教えてくれる。

アランが何か言うより先に、ベラがポワンに向けて言った。何故か慌てた様子だった。

「確かに彼はまだ子どもですが、他の人間にはない特別な力を持っています。現に、私が向こうで耳にした噂では、手強いモンスター相手にこれを退けたとか」

「良いのです、ベラ。私は見ていました」

やんわりとポワンが言う。その声の響き自体が楽器のように聞こえて、アランは感心するばかりだった。

「アラン、と言いましたね」

ポワンが呼ぶ。はい、と返事をしてアランは彼女の前に進み出た。ポワンはしばらくの間、アランをじっと見つめていたが、

「なるほど。あなたからは不思議な力を感じます。特にその瞳……特別な力を持っているというのも、うなずける話ですね」

「……？」

「ごめんなさい。本当なら、このようなことを頼むのは心苦しいのですが……私たちの願い、聞いてはもらえませんか」

アランは黙って話の続きを待った。ポワンはひとつうなずいてから、言う。

「実は、この村で大切にしていた宝物を、とある者に奪われてしまったのです。宝物の名は『春風のフルート』……これがなければ、妖精の村はもとより、人間界に春を呼ぶことができません」

「春が、よべない？　じゃあ、サンタローズがこのところずっとさむいままだったのは」

「ええ。『春風のフルート』が使えないためです」

アランは目を見開いた。まさか、春の訪れに妖精の力があつたなんて思いもなかったのだ。大変なことだとアランは思った。

ポワンの表情に真剣さが宿る。

「お願いです。盗まれた『春風のフルート』を取り戻して欲しいのです。この村と、そして人間界に春を呼ぶために」

36・地獄の殺し屋と言われても

話を聞き終えたアランはポワンの前を後にした。隣には、引き続きアランと共に行くようポワンから指示されたベラが歩いている。

「ポワン様は、今回の事件にとても心を痛められているの」

最上階から下りる階段を歩きながら、ベラが言う。アランが目線
で理由を尋ねると、彼女は小さくため息をついた。

「私たちの村は、まだいいわ。このくらいならみんな耐えられるから。けれど、人間界はそうはいかない。農作物は育たないし、そう
なると動物たちも飢えてしまう。単純に、寒さだけで命を落として
しまうこともあるかもしれない」

「あ……」

「それはとても大変なこと。だけどね、それと合わせてポワン様が
悩んでいることがあるの」

階段を下りきる。鏡のように磨かれた床をしばらく無言で歩き、

そのまま、表へ出た。太陽の光が瞳に眩しい。

「実を言うとね、『春風のフルート』を盗んだのが誰なのか、おお
よそ見当はついてるの」

「えっ!?!? そうなの?」

「この村の西、山脈の裾野にある洞窟。そこに『ザイル』って名前
の人間の子がいる。おそらく、フルートを盗んだのはその子……村
の中に、何人が姿を見た人がいるし」

「じゃあ、その子に会って『春風のフルート』を返してもらおう!
勢い込んで言うと、ベラは少し悲しげに微笑んだ。アランは眉を
八の字にした。

「……ダメなの?」

「いいえ。どんな理由があろうと、盗んではいけないものを盗んで
しまった。だから取り返さなきゃ。それは絶対にしなきゃいけない

ことなんだけど」

そこまで言いかけたとき、ふいにベラを呼ぶ声がした。村の妖精の一人が、ベラに駆け寄る。

「ごめん、ベラ。ザイルの奴、見失っちゃって……。北に向かったのまでは確かめたんだけど」

「いいよ、無理しないで。助かったわ。あの辺り、最近モンスターがよく出没するようになって危険だったでしょう？ ケガはなかった？」

「うん。大丈夫」

「そう、良かった。それにしても北、か。おそらく氷の城に向かったんでしょけど……。困ったな。あそこは確か」

友人らしい妖精と何やら相談を始めるベラ。「少しだけ待って」と彼女に言われ、アランは切り株状の一軒家に足を向けた。ちょうどそこで、老人が一人たき火に当たっていたのだ。そばには何とスライムまでいる。だがアランは恐れなかった。そのスライムからは以前サンタローズの洞窟で出会ったスライムと同じ、敵意のない、穏やかな気配を感じたからだ。

「ここ、いいですか？」

「ああ、いいとも」

老人が言う。胸に抱いていたチロルを下ろし、アランはたき火に手をかざした。雪化粧の割には寒さを感じないとは言え、何となく火に当たるとほっとした。チロルも大きくあくびをする。

そんな二人（一人と一匹）を微笑ましげに眺めていた老人だが、ふと、その表情が怪訝に染まった。

「んん？ 坊や、君と一緒に連れているのは……」

「あ、はい。チロルっていいいます。僕の大切なともだち」

「なああうっ！」

「友達……ほおっ、これは。これは驚いた！」

アランは首を傾げる。老人の顔には驚きと微かな畏怖が見て取れた。

「坊や。この子がどういふ種族か知っているかい？」

「？ ううん。ネコじゃないの？」

「その子はキラーパンサー 別名『地獄の殺し屋』と言われる種族じゃよ。間違いない」

アランは絶句する。チロルがちらとアランの顔を見上げた。目が合うと、アランは驚きの表情をゆっくりと溶かして、チロルの毛並みを撫でた。

老人が咳払いをする。

「あー、ごほん。すまんかった。その子の目を見れば、人に危害を加えるようなものではないことぐらい、僕にもわかる。だがあの獰猛な種族が、まだほんの子どもとはいえ人になつくなど信じられんわい」

「チロルはチロルです」

「なあごっ」

「すまんすまん」

老人は笑顔を見せ、それからじっとアランの顔を見つめた。

「……坊やは、どうやら不思議な力を持っているようじゃ」

「ときどき、言われるよ。けど僕は僕だから」

「そうか。偉いの。おそらくその力は天から授けられたものじゃろう。大切にしなされよ。いつまでも、な」

そう言うと老人は目を閉じた。

37・柔らかな銀世界

「アラン！ お待たせ」

しばらくして、ベラが戻ってくる。アランはぼんぼんとチロルの頭を撫で、半分眠りかけていた相棒を起こす。

「あ」

「？ どうしたの」

アランはベラが持っていた武器に声を漏らす。かつてサンタロースの洞窟でスライムからもらったものと同じ、『かしの杖』だ。アランの視線に気付いたベラが、若干緊張した表情でうなずく。

「私、金属武器は苦手なの。でもこれなら使い慣れているし。大丈夫。戦いはあまり得意じゃないけど、あなたに負担はかけないわ。そうはいつでも私の方がお姉さんなんだし、頼ってくれていいのよ」

「……ふふっ」

どこかで聞いたような台詞にアランは笑った。ベラが首を傾げる。チロルはチロルで、アランを守るのは自分の役目だと言わんばかりになごなこと鳴いていた。

アラン、チロル、ベラの三人（二人と一匹）で妖精の村を出発した。

一面の銀世界となった平原を歩く。人間世界に降る雪とはまた違うのか、踏みしめると砂のように柔らかな感触が返ってきた。素足のチロルも冷たさは感じないらしく、軽い足取りでついてくる。

「本来、この雪はポワン様が春を呼ぶと同時に消えてなくなるものなの。今は『春風のフルート』が奪われたせいで、まだ消えずに残っているのだけれど……このまま状況が変わらなければ、いずれは人間世界のように寒さを感じるようになるかもしれないわ。雪が腐っていくの」

初めて聞く表現ながら、アランは容易にその姿を想像することが

できた。重く、湿った塊になっていく雪……それはこの美しい光景を一変させてしまうだろう。

先頭を歩くベラが、ふと足を止めた。

「それに、春が呼べない影響は景色だけじゃないから」

強ばった声で、彼女は『かしの杖』を構える。

目の前にモンスターが現れたのだ。その姿を見たアランは思わず
咳く。

「り、りんごのばけもの……?」

姿形はまさに果物のりんごそのもの。だが表面にははつきりと目が見え、特に口は巨大で鋭い歯がびっしりと並んでいた。

「ガツプリンよ。彼らだけじゃないけど、もともとこの辺りのモンスターはともおとなしい。なのにここ最近、よく私たちを襲うようになった。アラン、下がって」

口をしきりに動かして、硬質な音を立てて威嚇するモンスターに、ベラは『かしの杖』を握りしめて集中する。彼女の周辺が熱を持ち始めた。

「、さあ食らいなさい! ギラッ!」

火炎魔法。振り払った杖の先から炎が帯となってモンスターに襲いかかる。甲高い悲鳴を上げ、ガツプリンはひっくり返ったまま動かなくなつた。

額の汗をぬぐうベラ。直後、足元でチロルが鋭い声を上げた。

「ぐるるっ!」

「えっ!?!」

ベラの側面。茂みになった場所から突如、別のモンスターが襲いかかってきたのだ。黄土色の体に鋭い爪、なにより口から垂れ下がった長い長い舌が目焼き付く。

『つちわらし』だ

不意を突かれたベラはとっさに頭を守った。だが、いつまで経っても衝撃は訪れない。恐る恐るベラが目を開くと、そこには悲鳴を上げる間もなく一刀両断されたモンスターの姿があった。

光となつて消えていく『つちわらし』を背に、アランは控えめな笑みを見せる。

「だいじょうぶ？ ベラ」

「え、ええ……。あのモンスターはアラン、あなたが？」

「うん。チロルが注意してくれなかつたらあぶなかつたよ。お父さんもよく言つてた。『楽に勝ったときほど気を引き締めるのだ』って」

「そ、そうなの……」

「僕は一回失敗しているから、同じ失敗はくりかえしたくなかつたんだ」

そう口にしながら、アランは初めてスライムと戦つたときのことを思い出していた。

ベラがゆっくりと表情を崩す。何故か、大きなため息までついていた。

「ありがとう。助かつたわ。それにしてもすごいわね。噂では聞いていたけど、これほどだなんて」

「そんなことないよ」

「ううん。とつても心強い。お姉さんぶつて前に出た私が何だか恥ずかしいわ」

こつん、と自らの頭を小突くベラ。ついでに舌まで出してしまうその茶目っ気ある仕草に、ベラはもともとこつという性格なのかなとアランは思った。人間界での活動がどこか子どもイタズラじみていたのもうなずける話だった。

気を取り直したのか、ベラが晴れやかに言う。

「さあ。まずは西の洞窟に向かしましょう。ザイルのいる宮殿に入る方法が、そこにあるはずよ」

38・西の洞窟と昔の不思議

歩くことしばらく

三人の目の前に、洞窟の入り口が現れた。巨大な岩をくりぬいたような、きれいな半円形の入り口である。森の直中にあり、辺りは水を打ったように静かだ。

チロルがしきりに地面の匂いをかいでいる。その様子を眺めていたアランに、ベラが声をかけた。

「下の地面、草が踏み固められているのがわかる？」

「そういえば」

「この洞窟に人が出入りしている証拠よ。アランもこれからいろんなところを冒険するなら、覚えておいたほうがいいわ」

素直にうなずくと、ベラは笑った。

「さあ、入るわよ。人が入れる場所だと言っても、中はモンスターも棲みついている。気をつけましょう」

階段状にきれいに磨かれた石の上を歩く。洞窟特有の、ひんやりとした空気がアランの肌を撫でた。

足を踏み入れてすぐ、アランは驚く。

「これは……」

辺りを見回した。比較的広い道。半円状になった天井は大の大人が通っても十分な高さがある。サンタローズの洞窟には道の脇のあちこちに抱えるほどの岩が転がっていたが、それも見当たらない。

アランが驚いたのはその小綺麗さ　　だけではない。
見えるのだ。そういった洞窟内部の様子が、はっきりと。

松明もないのに、明るい。まるで岩肌自体が柔らかな光を放っているかのように。

「そうか。アランは初めてなのね」

「明るい。どうして？　僕が入った洞窟は、たいまつがあったから

明るかったのに」

「私も名前や原理は知らないのだけど、大昔に高名な冒険者が訪れた洞窟にこのような『光る仕掛け』を施したらしいわ。私たち妖精族は人間と比べて比較的長命だけど、そんな私たちでも記憶の彼方になってしまっただけのこと。時折、こうしてその仕掛けが残っている場所が見付かるの。この西の洞窟もそのひとつ。もっとも、後で手は加えられたらしいけれど」

人間界にも残っているかも知れないわね、とベラは言った。アランはただただ驚くばかりだった。チロルはどこか落ち着かないのか、しきりになごなこと唸っていた。

視界が良好なせいか、歩を進める足も心なしか軽い。

道中にあつた立て看板の文字が読めず、ベラに代わりに読んでもらう。内容は大したものではなかったが、まだ十分に文字の読めないアランに、ベラは優しく教えてくれた。

明るい道に、新しい発見。思わず心が弾んで鼻歌を歌いかけ、ベラに注意されてしまった。首をすくめるも、何だか気恥ずかしい気持ちになる。

アランには、きょうだいがいない。ビアンカは年齢的には上だが、アランの気持ちとしては年の近い幼なじみだ。こんなふうに『お姉さん』な誰かと一緒に旅をするなんて、今までは考えもしなかった。僕にお姉さんがいたら、こんな感じなのかな……とアランは思った。

アランの気持ちを察したのかどうか、足元でチロルが服の裾を引っ張った。「あたしがいるじゃない」と言っているように見えた。

「そういえば、アランはお父様と冒険しているってことよね」
ふと、ベラがたずねた。

「こんなに小さな時から二人で世界を回るなんてすごいことだわ。危険なことも多いはずだけど……どうしてあなたのお父様は旅に出ようと思ったのかしら」

細い指先を顎にあて、小首を傾げるベラ。

アランはかつてピアノカにも話した内容を告げた。父は母を探しているようだ、と。

話を聞いたベラはピアノカと同じく、気まずそうに目を伏せた。だが、すぐに顔を上げる。

「事情はよくわかるわ。でも、私から言わせたらアランはまだまだ遊びたい盛りじゃない。友達も回りにいない中で世界中を歩き回るなんて、ちよつと可哀想だわ」

「でも、僕は大丈夫だよ。さびしくなんかないよ」

「アランはいい子ね、本当に。でも、たまにはちゃんとお父さんに甘えないとダメだよ」

そういうものだろうかとアランは思う。確かに同世代の子どもたちと一緒に遊んだりという記憶はアランには乏しいが、父はずっと一緒にいたのだ。守ってきてくれたのだ。父の背中を見て、それを追いかけることは、アランにとってひとつの喜びでもある。

「……まあ、あなたのお父様はきっととんでもない人なんでしょうけど」

「え？」

「ううん、何でもない。ひとりごとよ」

ベラは首を振った。それから、少しいたずらっぽく微笑む。

「じゃあ、この旅が終わるまでの間はお姉さんに甘えていいからね。こう見えて、生きてる年数で言えばあなたよりずっと上なんだから」
「うーん」

「あ、なあにその反応。失礼しちゃうわ」

ベラがむくれる。その愛嬌のある仕草に、やっぱりベラもお姉さんって感じじゃないのかなとアランは思った。それはそれで、心地良い気持ちだった。

足元でチロルが「あたしを忘れるな」と再度抗議の声を上げていた。

39・ドワーフ族の長老

「そういえば、この洞窟にはなにがあるの？」

アランはたずねる。『春風のフルート』を盗んだザイルという者は、西ではなく北の宮殿に向かったはずだ。

ベラの表情が少しだけ険しくなる。

「その昔、高名なドワーフの職人がこの洞窟の奥深くに、ある秘術を封印したの。それを習得すれば誰でも錠を解くことができるという『カギの技法』と呼ばれるものよ」

「カギの技法？」

「ザイルの向かった宮殿の入り口は固く閉ざされている。だけど『カギの技法』があれば、宮殿の入り口を開け中に入ることができるようになる。ただ、今までカギをこじ開ける技術なんて必要としていなかったから、私たちの誰もその技術を身につけていなくて」

だからまずは『カギの技法』を手にいれる必要がある、とベラは語る。

何だか泥棒さんみたいだなとアランは思ったが、それ以上にベラの表情が気になっていた。

「そのカギの技法を身につけることって、ベラにとってはいけないことなの？」

「そんなことはないけど……まあ、ドワーフが編み出した技術つてところはあんまり気に入らないって言えば気に入らないけれどね。ただそれ以上に、この洞窟は……」

そこで口をつむぐ。アランは首を傾げた。

「なに？」

「……そうね、この先の話は、実際に会ってから話をした方がいいかもしれないわね。アラン、少しだけ寄り道するわよ」

「え？ どういうこと？」

「あなたに会わせたい人がいるのよ。その人に会うことも、この洞窟に来たもうひとつの理由だから」

それつきりベラは黙り込む。表情は険しいというより、どこか悲しそうに見えた。アランもそれ以上は詮索せず、黙って彼女の後に続く。

しばらくすると、洞窟の明るさはまた別の、松明の光が見えた。岩壁に開けられた大きな穴から漏れてきている。

アラン達は穴の奥に足を踏み入れる。そこは四角い空間となっていて、綺麗に整えられた調度品が据えられている。寝台もあり、絨毯もあった。誰かの居室となっっているようだ。

中央の丸テーブルに、ふたつの影がある。

「あっ、ようせいだ。ようせいがきた！」

テーブルの上で丸い体を弾ませたのはスライムだった。敵意は感じない。妖精の国のスライムはみない子なのだろうかとアランは思う。よくよく目を凝らすと、かなりやんちゃな顔つきにアランには見えた。

その隣、木製の椅子にゆったりと腰掛けたひとりの老人が、同じくアランたちに気づいて声をかけてきた。

「これはこれは。妖精族の方が、わしに何か用かな？」

「お久しぶりです、長老」

「おお、その声はベラか。こんな穴蔵で生活していると、外のことに疎くなつていけない。しかし今日はどうしたことかね。どうやら脇にいるその子……妖精ではないな、人間の子かい？」

「ええ、その。ザイルのことで」

少々固い声でベラが告げる。妖精族とドワーフ族は仲が良くないという話をかつて絵本で見たことがあったが、本当なのかも知れないとアランは思った。

ベラの袖を引く。

「ねえベラ。この人は」

「この人はこの辺りに住むドワーフ族の長だった人よ。昔、妖精の

村と一緒に住んでいたの」

「え！？ そうなの？ でもドワーフさんとは仲が悪」

言いかけ、アランは慌てて口を閉ざした。ドワーフの長老は苦笑いする。

「ベラ。おまえさん、この子に肝心なことを伝えてなかったようじやな」

「……。実際に会って、話をした方がいいと思って」

「そうさな。……坊や、名前は何と言う？」

尋ねられ、アランは名乗った。正面から彼の表情を見ると、とてもベラが嫌がるような気性の持ち主には見えない。

長老は目を細めた。

「よい瞳をしている。不思議な瞳だ。わしはドワーフのゴース。昔、ポワン様のもとでザイルの面倒を見ておった者じゃ」

アランは驚きに目を見開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7449x/>

ドラゴンクエスト? ~天空の花嫁~

2011年11月21日03時20分発行